玉名市文化財調査報告　第14集

石貫ナギノ横穴群

－確認調査報告書－

2005（平成17）年.3月

玉名市教育委員会

玉名市文化財調査報告　第14集

石貫ナギノ横穴群

－確認調査報告書－

2005（平成17）年.3月

玉名市教育委員会

ご　挨　拶

玉名市を含む菊池川流域は、古墳時代に築かれた装飾古墳の宝庫であり、その内容・分布ともに全国で最も充実している地域であります。玉名市域には、国指定史跡である大坊古墳、永安寺東・西古墳、石貫穴観音横穴、石貫ナギノ横穴群があり、貴重な文化財を保存・活用するため、昭和52年度から大坊古墳、平成11年度から永安寺西・東古墳の保存整備を手がけております。

本書は、平成15年度に実施した、国史跡石貫ナギノ横穴群周辺の確認調査の報告書です。本遺跡は、石貫穴観音横穴と共に装飾のある横穴墓として、玉名市が全国に誇る文化財の一つであり、最近は石貫まちづくり委員会が実施している「一区一輝運動」の中核として活用が検討されています。

今回の調査が、今後の保存と活用の基礎的な資料となると共に、市民の皆様をはじめ、一般の方々の文化財に対する理解の一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査、報告書作成にあたっては、各方面で多くの方々にご指導、ご協力を賜ったことに対しまして厚くお礼を申し上げます。

平成17年3月31日

玉名市教育委員会

教育長　森　義臣

例　　言

1．本書は、玉名市教育委員会が平成15年度に国・県の補助を受けて実施した、石貫ナギノ横穴群の確認調査報告書である。
2．調査は、玉名市教育委員会社会教育課竹田宏司が担当した。
3．本書掲載遺構及びトレンチ等の実測図は、竹田のほか、末永　崇、蜷父雅史、古賀武子、平野輝代が作成した。精図は竹田、末永が行った。
4．遺物の実測、精図は、末永が行った。
5．調査時の写真撮影は、竹田が行い、遺物写真撮影は末永が行った。
6．挿図に使用している座標値は、国土調査法第２座標系に基づいており、方位はすべて座標北を示す。
7．出土遺物の整理作業は、玉名市文化財整理室で行った。
8．出土遺物は、玉名市文化財整理室で保管している。
9．本書の執筆は竹田、末永が行い、編集は末永が担当した。

本　文　目　次

ご挨拶
例言
本文目次
挿図目次
写真目次
1　調査の経緯…… 1
2　地理的環境…… 3
3　歴史的環境…… 3
4　調査体制…… 4
5　調査の方法…… 5
6　調査の成果…… 7
7　まとめ…… 13
報告書抄録 40

挿　図　目　次

第１図　調査地位置図…… 2
第２図　調査地周辺遺跡分布図(古墳時代)…… 6
第３図　石貫ナギノ横穴群トレンチ配置図…… 8
第４図　調査地周辺地籍図及びトレンチ配置図(1) …… 9
第５図　調査地周辺地籍図及びトレンチ配置図(2) …… 10
第６図　確認調査トレンチ実測図(1T, 2T)…… 15
第７図　確認調査トレンチ実測図(3T, 4T)…… 16
第８図　確認調査トレンチ実測図(4T, 5T)…… 17
第９図　確認調査トレンチ実測図(6T, 7T)…… 18
第10図　確認調査トレンチ実測図(7T, 8T, 10T)…… 19
第11図　確認調査トレンチ実測図(9T, 11T, 16T, 17T)…… 20
第12図　出土遺物実測図…… 21
第13図　石貫穴観音横穴周辺地籍図…… 23

表　目　次

第１表　平成15年度石貫ナギノ横穴群確認調査出土遺物観察表…… 22

図　版　目　次

図版１　石貫ナギノ横穴群(南東から)…… 26
図版１　石貫ナギノ横穴群(北東から)…… 26
図版１　第１トレンチ全景(南西から)…… 26
図版２　第１トレンチ土層堆積状況(南から)…… 27
図版２　第２トレンチ上段全景(東から)…… 27
図版２　第２トレンチ上段土層堆積状況(西から)…… 27
図版３　第２トレンチ下段全景(南から)…… 28
図版３　第２トレンチ下段土層堆積状況(南西から)…… 28
図版３　第３トレンチ全景(東から)…… 28
図版４　第３トレンチ下段土層堆積状況(西から)…… 29
図版４　第４トレンチ全景(東から)…… 29
図版４　第４トレンチ上段全景(東から)…… 29
図版５　第４トレンチ上段土層堆積状況(西から)…… 30
図版５　第４トレンチ下段全景(西から)…… 30
図版５　第５トレンチ上段全景(東から)…… 30
図版６　第５トレンチ上段土層堆積状況(西から)…… 31
図版６　第５トレンチ下段全景(西から)…… 31
図版６　第６トレンチ全景(東から)…… 31
図版７　第６トレンチ下段全景(西から)…… 32
図版７　第７トレンチ上段全景(東から)…… 32
図版７　第７トレンチ上段土層堆積状況(西から)…… 32
図版８　第７トレンチ上段土層堆積状況(東から)…… 33
図版８　第７トレンチ下段全景(西から)…… 33
図版８　第８トレンチ全景(北東から)…… 33
図版９　第８トレンチ全景(北東から)…… 34
図版９　第９トレンチ全景(北東から)…… 34
図版９　第９トレンチ上部(北東から)…… 34
図版９　第９トレンチ全景(南西から)…… 34
図版10　第10トレンチ全景(南東から)…… 35
図版10　第11トレンチ全景(南東から)…… 35
図版10　第11トレンチ土層堆積状況(南東から)…… 35
図版11　第12トレンチ全景(南西から)…… 36
図版11　第13トレンチ全景(南西から)…… 36
図版11　第14トレンチ全景(南から)…… 36
図版12　第15トレンチ全景(南から)…… 37
図版12　第16トレンチ全景(南から)…… 37
図版12　第17トレンチ全景(南から)…… 37
図版13　2・3・7・9・10・12・19・21…… 38
図版14　22・23・26・28・29・32・33…… 39

1　調査の経緯

石貫ナギノ横穴群及び石貫穴観音横穴は、大正６年に京都帝国大学が調査を行い、京都帝国大学文科大学研究報告が刊行され、広く知られることとなった。大正10年３月には両横穴群ともに国指定となっている。

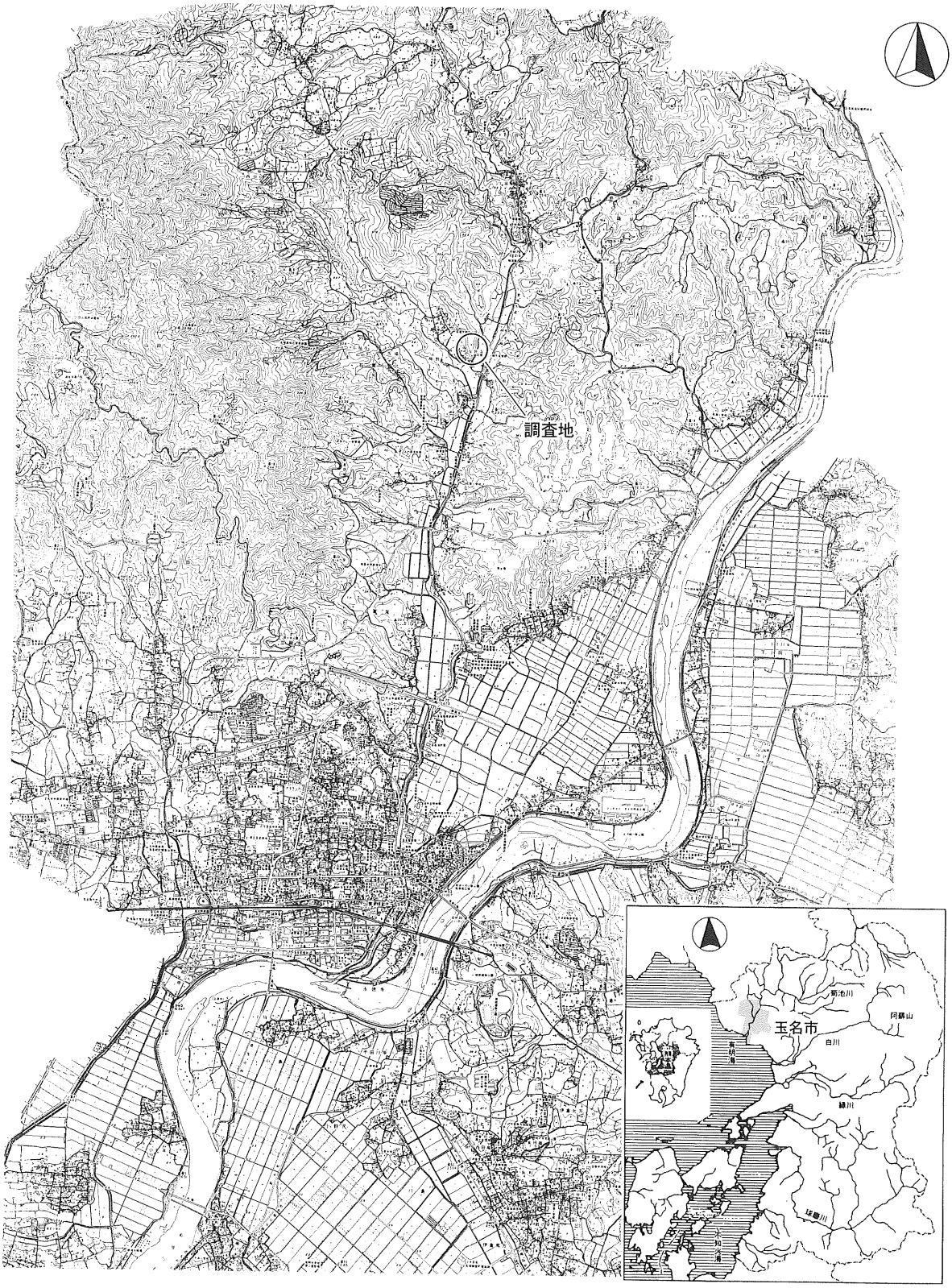
昭和54年には、熊本大学考古学研究室が測量調査を行い、翌年には報告書が刊行されている。続いて昭和56年から昭和58年にかけては、熊本県教育庁が装飾古墳総合調査を実施し、昭和59年に刊行された『熊本県装飾古墳総合調査報告書』にその成果がまとめられている。

熊本大学の調査の段階では43基が報告されているが、熊本県装飾古墳総合調査では48基となっている。熊本大学による調査では、北側の３基及び南側の２基が含まれていない。南側の１基については、それ以前の配置図で１号墓とされていたものと、昭和45年に新たに確認された西側に開口するとみられる１基である。装飾古墳総合調査報告書では、熊本大学による１号墓から43号墓を基本に、北側の３基を44～46号墓とし、南側の２基を47号・48号墓としている。44～46号墓については、現在の国指定範囲に含まれていない。南端に位置する48号墓は、昭和48年に熊野座神社旧参道の脇で発見されており、文化庁長官宛に発見届が提出されている。現在天井部の一部が崩落しており、本来は南西方向に開口するとみられる。付近から北側の石貫穴観音横穴にかけての西側崖面は、現状では横穴墓は確認されていないが、今後注意を要する。なお、西側崖下に位置する民家の庭から須恵器の高坏が出土しており、横穴墓の存在を窺わせる。

玉名市では、平成４年に「文化財総合整備計画」を策定し、両横穴群の一体的な整備と、国指定史跡大坊古墳や永安寺東古墳・西古墳なども有機的に結んだ活用を打ち出している。昭和57年に策定した「緑のマスタープラン」においては、歴史公園としての位置づけがなされており、平成11年策定の「都市計画マスタープラン」においても引き継がれている。

近年では、市が助成を行い、各小学校区毎に「一区一輝運動」と称するまちづくりを行っている。両横穴群が位置する石貫校区では、石貫ナギノ横穴群を核としたまちづくり計画を策定しており、横穴群に隣接する民家を整備し、「ナギノ交流館」として、見学者の便宜を図るとともに、まちづくりの拠点となる施設を設けている。地元住民からも、両横穴群の保存整備に関する要望が出されるなど、整備に向けての機運が高まっている状況である。

石貫ナギノ横穴群については、横穴墓本体が含まれる旧熊野座神社境内が一筆指定となっており、見学者が足を踏み入れる横穴墓前庭部分は民有地のままである。昭和40年代には地権者から公有地化の要望があっているが、実現していない。このため、今後の保護と活用を前提に追加指定を目指すこととして、現在未指定となっている石貫ナギノ横穴群前面の前庭部に相当する部分の状況を把握するために、今回の調査を実施したものである。横穴墓本体については、これまでも実測及び配置図の作成等の調査が行われていたが、前庭部に相当する部分については未調査であった。同時に未指定である北側の44号墓から47号墓周辺についても分布調査を実施し、範囲の確認を行った。また、石貫穴観音横穴についても、５号墓が指定範囲からはずれていることが指摘されていたため、公共座標による測量を行い、位置を確認している。



第１図　調査地位置図　S＝1/50,000

〈参考文献〉
濱田耕作　1967『肥後における装飾ある古墳及横穴』京都帝国大学文科大学研究報告第１冊
西住欣一郎・宮本千絵編　1980『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴群』金曜会
熊本県教育委員会　1984『熊本県装飾古墳総合調査報告書』熊本県文化財調査報告第68集

2　地理的環境

玉名市北部には、標高501.4mの筒ヶ岳を中心とする小代山地が位置している。その南東麓に広がる石貫丘陵性台地は、Aso-4火砕流堆積物からなっており、台地の開析によって丘陵地や谷が形成されている。南流する繁根木川沿いには低地が広がり、段丘が形成されている。

Aso-4火砕流堆積物の溶結部には柱状節理が発達しており、鉛直に近い崖を形成している。この崖に両横穴群をはじめ、多くの横穴群が形成されている。繁根木川の左岸、支流の山口川にはさまれて南へ延びる舌状の台地の、東側の崖面に石貫ナギノ横穴群、西側の崖面に石貫穴観音横穴がそれぞれ位置している。阿蘇溶結凝灰岩は適当な堅さを持ち、柱状節理により大型の原石が得やすいため、石材として利用されてきたものと指摘されているが、この柱状節理が崩壊することにより、ナギノ横穴群については、失われつつある横穴墓も多い。

ナギノ横穴群の前庭部に相当する部分は、段丘となっており、下段の水田面より３～５m程度の比高差がある。現状は、一部が畑地若しくは水田となっている他は、ほとんどが山林である。かつては崖下からの湧水を利用して田畑として耕作されていた部分も多く、平坦面が形成されている。８号墓周辺については、除草作業等の管理を行っており、比較的整えられているが、南端部と北側についてはほとんど手入れがされていない。竹林も利用価値が低くなったため放置されており、藪が生い茂っている状態である。このため北端の３基については、近づくのも困難な状態であった。

〈参考文献〉
規工川宏輔他　1993『玉名市史』資料篇３自然民俗　玉名市

3　歴史的環境

菊池川下流域は、凝灰岩の露頭が各所にみられ、宇土半島基部、氷川下流域とともに古墳時代の畿内大王墓に採用された石棺製作地として想定されている。玉名市域周辺では、前期から中期にかけて、凝灰岩製の舟形石棺を主体部にもつ山下古墳、院塚古墳、天水経塚古墳、天水大塚古墳などの古墳がみられるほか、多数の舟形石棺が分布しており、石貫ナギノ・穴観音両横穴群の位置する丘陵上にも舟形石棺の存在が知られている。

菊池川左岸に位置し、凝灰岩製横口式家形石棺を主体部にもつ江田船山古墳は、銀象眼の銘を持つ大刀や豊富な副葬品でとみに著名である。垂飾付耳飾りを出土している古墳が熊本県内で５ヵ所確認されているが、江田船山古墳をはじめ、大坊古墳、伝左山古墳、城ヶ辻６号墳が玉名市と隣接する菊水町に集中しており、有明海を介した朝鮮半島とのつながりも指摘されている。

６世紀以降は多くの装飾古墳が知られている。石貫ナギノ横穴群・石貫穴観音横穴から東約２㎞の菊池川を望む丘陵端部には、大坊古墳、永安寺東古墳、永安寺西古墳が現存しており、消滅した馬出古墳も彩色系の装飾古墳である。やや上流左岸の江田船山古墳で知られる清原古墳群には、塚坊主古墳がある。いずれも、凝灰岩を用いた横穴式石室を有している。

繁根木川流域、木葉川右岸の木葉山西麓、菊水町江田周辺などには、凝灰岩の露頭に多くの横穴群が営まれている。石貫ナギノ横穴群と石貫穴観音横穴の周辺では、石貫古城横穴群や繁根木川左岸に横畠横穴群、城迫間横穴群などの彩色系装飾横穴墓があり、やや下流には彩色及び線刻による装飾を持つ原横穴群が位置している。このほか、菊池川左岸の木葉川流域には田崎横穴群がある。

中世から近世にかけても凝灰岩の利用は続いていたものとみられ、玉名市周辺は石造物の宝庫である。菊池川を望む玉名市青木の県指定史跡青木磨崖梵字群が存在する崖面では、採石の跡が認められる。現在確認されている採石の痕跡は近世以降のものとみられるが、それ以前の採石の可能性もある。その他、諸所に採石の痕跡をみることができるが、今日ではやや上流の菊水町で採石を行っているほか、玉名市域では採石を行っているところはない。

4　調査体制

確認調査（平成15年度）

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　三次昭也（至平成15年12月19日）

教育長　森　義臣（自平成15年12月22日）

教育次長　久多見澄夫

調査総括：社会教育課長　牧野和明

社会教育課審議員兼課長補佐　西田道吾

調査事務：文化係長　岩永次郎

文化係主事　清田静香

調査担当：文化係参事　竹田宏司

文化係埋蔵文化財発掘調査員　蜷父雅史

作業員：雪野雪義　河野俊夫　境　昭一　北田テイ子　吉井哲也　古賀武子　平野輝代

調査指導及び協力者（敬称略）

坂井秀弥（文化庁）　高妻洋成（奈良文化財研究所）　朽津信明（東京文化財研究所）

甲元眞之　杉井　健（熊本大学）　高木正文　西住欣一郎　亀田　学（熊本県文化課）

池田朋生（熊本県立装飾古墳館）　美濃口雅朗（熊本市教育委員会）

徳永　龍（玉名市公民館石貫支館長）　国武利春（石貫４区区長）

城戸哲也（石貫校区まちづくり委員会委員長）　地権者の皆さん　石貫４区の皆さん

報告書作成（平成16年度）

調査主体：玉名市教育委員会

調査責任：教育長　森　義臣

教育次長　久多見澄夫

調査総括：社会教育課長　西田道芦

調査事務：文化係長　竹田宏司

文化係主事　清田静香

報告書担当：文化係主任　末永　崇

文化係埋蔵文化財調査員　蕷父雅史

整理作業員：古賀武子　平野輝代

調査指導及び協力者（敬称略）

古城史雄（熊本県玉名教育事務所）　中原幹彦（植木町教育委員会）

木村龍生（熊本県文化課）　檀　佳克（熊本大学埋蔵文化財調査室）

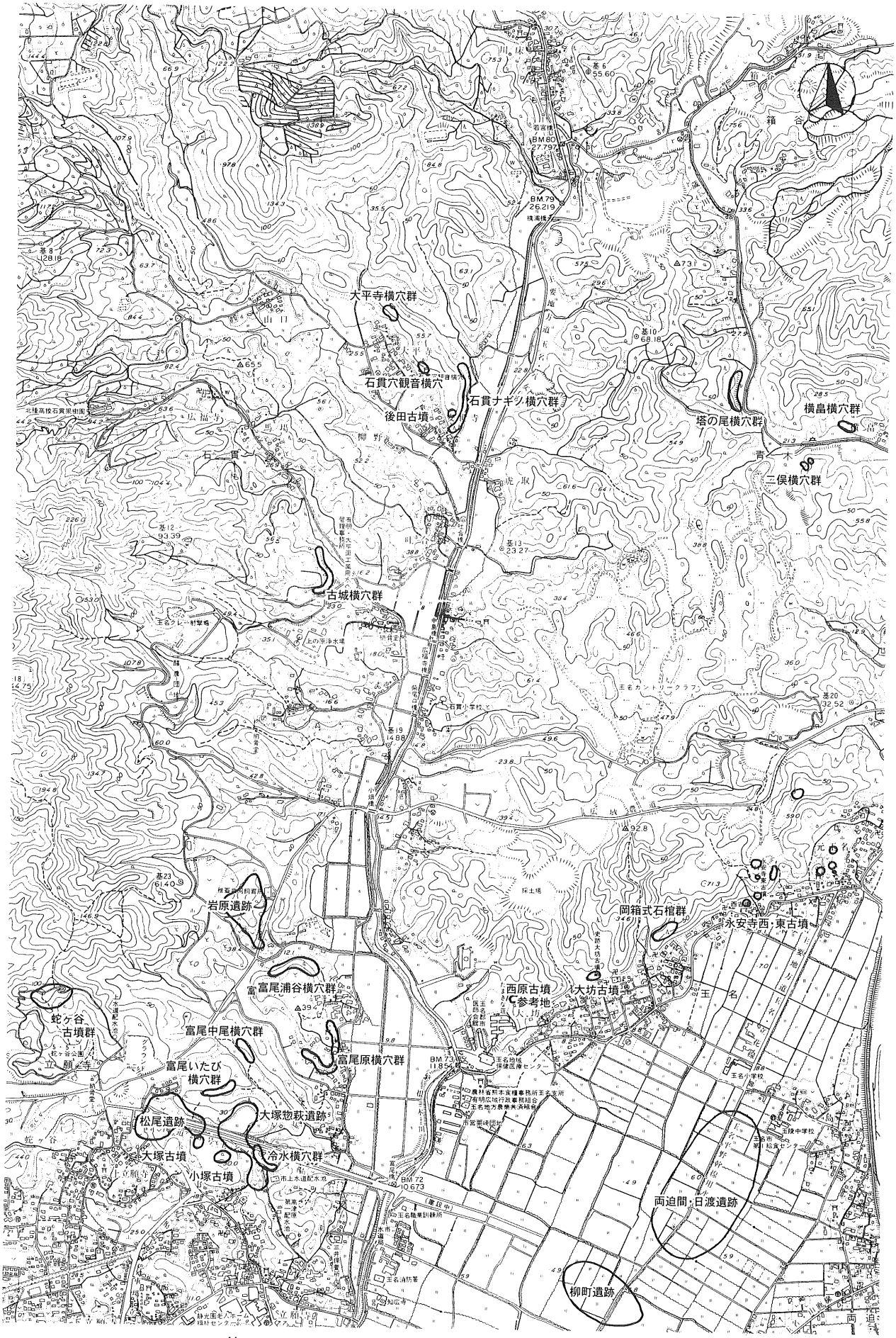
5　調査の方法

ナギノ横穴群の前庭部が想定される丘陵端部の傾斜地についてトレンチを設定し、旧地形及び遺構の確認を行った。基本的に、地形の傾斜に直行する方向に幅１m前後でトレンチを設定している。あわせて、横穴群南東側の水田についても、将来の土地利用を考慮し、トレンチを設定した。横穴群の前庭部に相当する部分は、ほとんどが山林になっており、横穴群に直射日光が当たるのを防いでいる。このため急激な環境の変化を考慮し、最低限のトレンチの設定を行っている。水田部分のトレンチについても、今後の耕作への影響を考慮し、最小限のトレンチの設定としている。なお、39号墓から最北端の44～46号墓周辺にかけては、立入りが困難なほどの藪になっていたため、分布調査を行うにあたり見通しが利く程度の伐採を行っている。

第１トレンチから第３トレンチ及び第４トレンチ下段については、人力による掘削が困難であったため、重機を使用して表土の掘削を行った。第４トレンチ上段及び第５トレンチから第９トレンチについては、重機の進入により横穴墓へ影響を与える可能性があることから、全て人力による掘削である。

各トレンチについては、縮尺１／20で土層断面図及び平面図を作成している。トレンチの位置については、玉名市地籍調査に伴う基準点を使用し、日本座標系の座標を用いて、光波測距儀による測量を行い、縮尺１／200で配置図を作成した。レベルについても、玉名市地籍調査に伴う基準点を使用している。個々の横穴墓の位置については、一部を光波測距儀により測量し、熊本大学が作成した配置図を、改変のうえ当て嵌めている。今後、改めて詳細な測量を行う計画である。

写真は、35㎜の一眼レフカメラを使用し、カラーリバーサル及びモノクロネガフィルムによる撮影を行い、補助的にカラーネガフィルムを用いて調査過程等の記録を行っている。



第２図　調査地周辺遺跡分布図（古墳時代）　S＝1/20,000

6　調査の成果

第１トレンチ（第６図）

ナギノ横穴群の丘陵から南へ延びる段丘状の微高地南端部に設定したトレンチである。宅地となっており、東側水田面との比高差は３ｍ近い。「ナギノ交流館」駐車場として使用されているため、駐車場の使用を妨げないよう、その南端に３ｍの長さで設定した。現在の地表面は砕石と山砂で整地されており、Ⅱ層とした旧表土が30～50cmの厚さである。その下には褐色を呈する粗砂層が認められ、地山と判断した。遺物、遺構ともに確認されていない。

第２トレンチ（第６図）

第１トレンチを設定した宅地の北側、畑となっていた部分に設定したトレンチである。南側の宅地とほぼ同レベルである。

第１トレンチとは大きく様相が異なり、表土の下に耕作によるものとみられるⅡ層が堆積しており、さらにⅢ層とした黒褐色土の堆積が認められる。Ⅲ層は、わずかな締まりと混入物の違いなどから、さらに細かく分層している。無遺物層と判断したⅣ・Ⅴ層の上面には、ステップが認められ、第３トレンチの落ち込みへ続くものと判断している。ステップには、場所により薄い砂の堆積が認められ、水流の作用によるものと判断している。また、鉄分の貫入がみられる。Ⅲ層中には凝灰岩の破片が多く含まれているが、１点のみ安山岩の板石が出土しており、横穴墓の閉塞石であった可能性がある。Ⅲ層からは、古墳時代及び弥生時代中期の遺物が出土しているが、細片が少量である。（第12図）

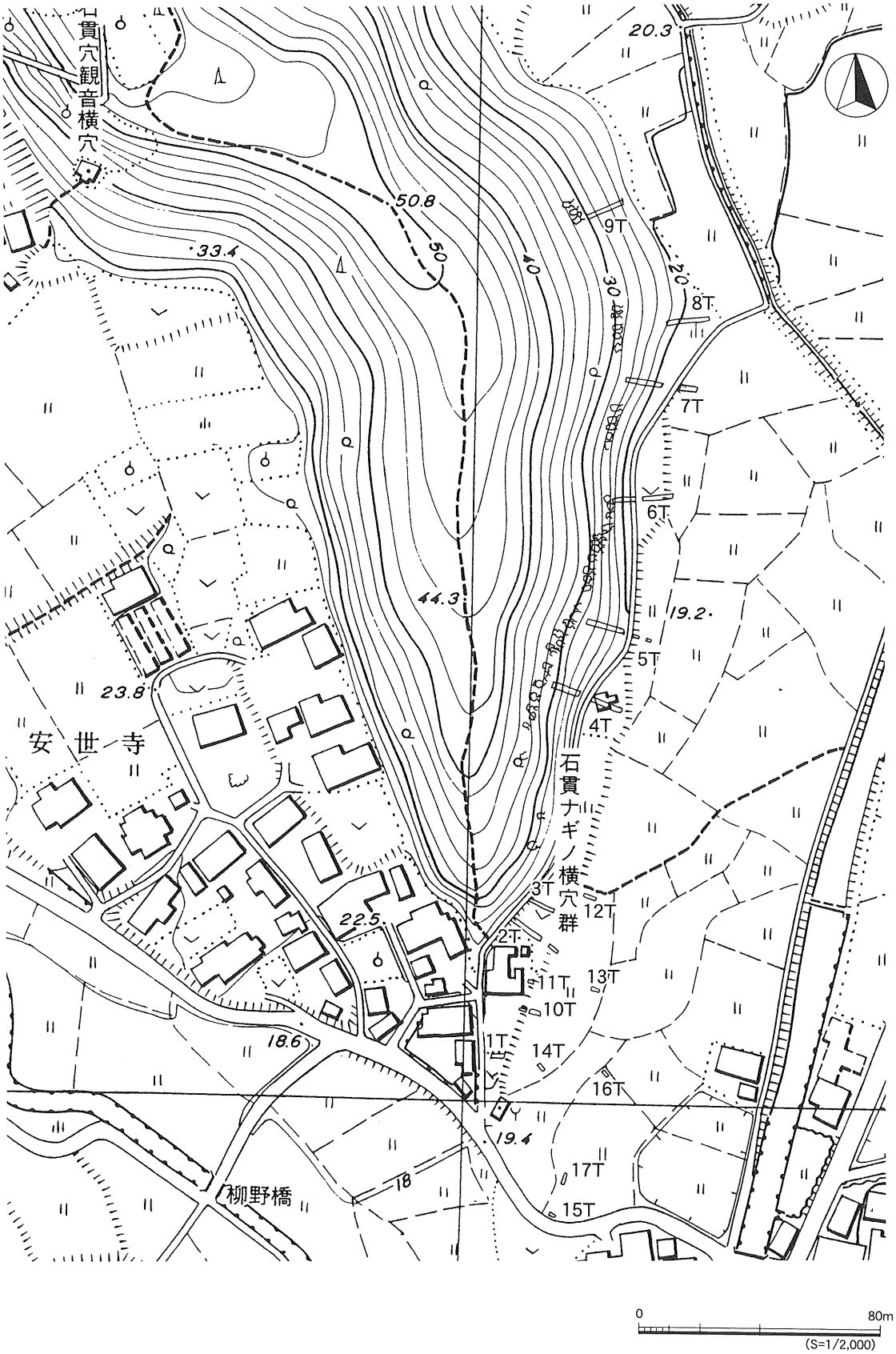
第３トレンチ（第７図）

第１・第２トレンチの宅地の北側に連なる畑地に設定したトレンチである。土層の堆積状況は第２トレンチと近い内容である。表土の下にⅡ層とした旧耕作土があり、その下に、Ⅲ層とした黒褐色土層が薄く認められる。Ⅴ層とした地山の粗砂層上面において、第２トレンチへ続くとみられるステップと、南北方向に続くとみられる浅い溝状の落ち込みが確認されている。

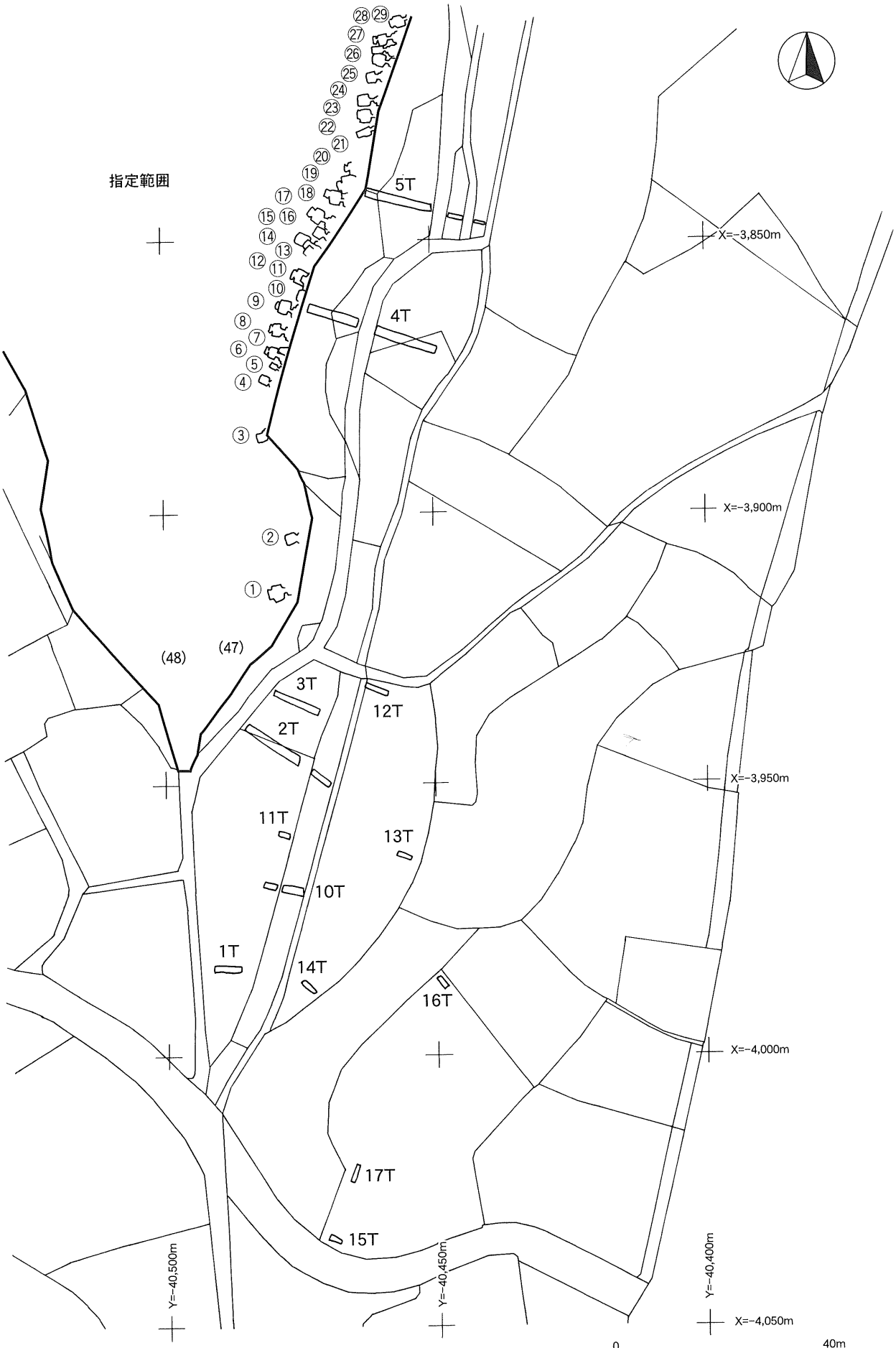
第４トレンチ（第７・８図）

ナギノ横穴群中最大規模の８号横穴墓の前庭部に相当する部分に設定したトレンチである。現在の地表面は、西端部でも横穴墓の底面から１ｍ程低くなっている。さらに、東側の里道をはさんで東側の低い段にも、続けてトレンチを設定している（下段）。上段のトレンチは、ほぼ全面に崩落したとみられる凝灰岩片が広がっており、また、締まりが非常に強いため掘削が困難であった。このため、Ⅳ層若しくはⅤ層に到達しておらず、遺構の有無も明確にできなかった。Ⅱ層・Ⅲ層からは、若干の須恵器、鉄製品などが出土している。（第12図）

下段では、湧水のため途中で掘削を断念した。ナギノ横穴群全体にわたり所々で現在でも湧水が認められる。以前はさらに多くの湧水点があり、第４トレンチ周辺でも湧水がみられた。現在では、この湧水点は埋められている。湧水に阻まれて完掘が困難であったが、西端部でサブトレンチを設



第３図　石貫ナギノ横穴群トレンチ配置図



第４図　調査地周辺地籍図及びトレンチ配置図(1)

第５図　調査地周辺地籍図及びトレンチ配置図(2)

定し、地山の粗砂層を確認しており、繁根木川に向かって緩やかに傾斜しているものとみられる。上段のⅢ層が、里道をはさんで東側に徐々に下がりながら続いており、里道の際の付近で多量の土器が出土しているが、原位置を保っているものではない。ほとんどが須恵器の甕胴部片である。（第12図）

第５トレンチ（第８図）

第４トレンチの北側、19号墓の前に設定したトレンチである。里道をはさんで、上段の部分と、一段下がった中段、そして東側の水田部分に設定している（下段）。西端の崖面に接した部分では、凝灰岩の下部が非常に軟質であり、色調もⅣ・Ⅴ層と近似した褐色を呈するため、層位の上下関係を明確にすることができなかったが、Ⅲ層自体が溶結度の低い凝灰岩ととらえている。

上段では、表土の下はほぼⅤ層であるが、崖面の直下では、全体がやや窪んでおり、その底面において崖面に平行に延びる小規模な溝状遺構を検出している。窪んでいる部分に堆積している土は、黒褐色を呈しており、便宜上Ⅲ層としているが、中段のⅢ層とは違って粘性が弱く、さらさらの状態である。明確な遺物を伴わないため時期は明確にできないが、後世のものである可能性が高い。前庭部の遺構については明確に確認することはできなかった。中段の黒褐色の覆土を持つ落ち込みの部分から、比較的まとまった量の遺物が出土している。古墳時代の須恵器がほとんどであるが、中世の青磁片が含まれている。（第12図）

第６トレンチ（第９図）

第５トレンチの北側、横穴の確認されていない部分に設定したトレンチである。里道をはさんで、上段の部分と、東側の畑地に設定している（下段）。上段では、表土の直下に無遺物層が確認されており、遺構・遺物ともに確認していない。崖面の直下では大きな空洞が認められ、湧水により抉られたものと考えている。数カ所に下段に向かって地滑り状の亀裂が認められる。

下段のトレンチは、最下段の水田面まで対象にしており、現状で１m程度の段差がある。下段の上位で等高線に平行に溝状遺構が確認されているが、覆土の状況から、後世のものと考えている。下位の水田面については、水田床土の下は地山の粗砂層である。

第７トレンチ（第９・10図）

第６トレンチ同様、横穴の存在しない部分に設定したトレンチである。この付近から北にかけては、崖面がやや西寄りに湾曲しており、第８トレンチにかけて、三角形の台地状の張り出しが認められる。第７トレンチの付近も、崖面直下の上段の部分と、２m近い段差を持つ中段、さらに里道をはさんで東側の水田面と３段になっており、高低差は約３mである。このトレンチでも、第４トレンチ同様に凝灰岩の転石が多量に埋まっており、上段から中段においては完掘することが困難であった。水田部分に設定した下段トレンチでは、上段から中段とは様相が異なっており、繁根木川に向けて傾斜を持ち、砂質土が堆積している。

遺物は、中段から下段にかけて須恵器が若干出土している。（第12図）

第８トレンチ（第10図）

横穴墓群が造営されている崖線がやや西寄りに方位を変える屈曲部には、段丘状の張り出しが認められる。そのもっとも張り出した部分に設定したのが第８トレンチである。39号から43号墓が並ぶ崖面直下からトレンチを設定すべきであったが、上段の部分については明治年間に登記されて以来相続の手続きが行われておらず、同意を得ることが困難であったため、トレンチの設定を断念した。

一面の竹林となっていたため伐採を行った。重機により表土を掘削し、褐色を呈する層が確認されたため、一旦、その上面で揃えた。西端部では砂層が確認されており、他のトレンチでは確認されていない土層であったことに加え、黒褐色土のブロックが含まれていたため、２次的な堆積と判断し、人力による掘り下げを行った。粘性が強く掘削が難航し、また掘削深度も深くなったため、西端部の砂層から東側にかけて深掘を行い、下位の土層の確認を行った。その結果、褐色土の下位において、還元し灰色を呈する砂層（Ｖ層）が確認された。上位の褐色土については、東側への傾斜が認められ、台地上からの地滑り等によるものと考えており、下位の砂層が、自然堆積によるものと判断している。

第９トレンチ（第11図）

もっとも北側に位置、現時点で公表されている分布図には含まれていない44号墓から46号墓のうち、44号墓前面に設定したトレンチである。43号墓から44号墓の間は横穴墓が確認されていない空白部分がある。この部分は崩落が認められるが、凝灰岩の硬度が低く、当初から石質を選んでいたことを考えると、当初から造営されていなかった可能性がある。

北側の水田面から、44号横穴墓の床面までは７ｍ以上の高低差がある。現状では水田面を含め４段のステップからなる。このうち、水田面から１ｍ程高くなっているステップから、44号墓直下までトレンチを設定した。

最上段では、Ⅳｃ層としている溶結度の低い凝灰岩がみられ、その上に凝灰岩が風化したことによる土層の堆積がみられる。そこから一段下がったステップがあり、凝灰岩の計ｍはあろうかという転石がある。上面に浅い窪みがあり、人為的なものとみている。第４・第７トレンチでもほぼ同様の位置に、大きめの転石がみられ、意図的に設置されている可能性もあるが、明らかにできていない。そこからさらに下の段は、最下層に地山である粗砂の堆積が認められ、湧水が著しい。下段の部分は、本来湧水池であった部分を、埋め立てたものと考えている。遺物はほとんどが下段の湧水池部分から出土している。（第12図）

第１０トレンチ（第10図）

第２・第３トレンチにおいて、遺物包含層及び南北方向に延びるステップが確認されており、第１トレンチでは確認できなかったため、遺存範囲を確認するため、第２トレンチと第３トレンチの間に設定したトレンチである。しかし、このトレンチでは第１トレンチと同様の状況であり、第２・第３トレンチからの続きが確認されなかったため、第11トレンチを設定した。

第11トレンチ（第11図）

第２トレンチと第10トレンチの間に、第10トレンチと同じ目的で設定したトレンチである。第２トレンチの南側には既存の建物があり、トレンチの場所が限定されていたため、東側の斜面に設定した。表土と無遺物層と判断した褐色を呈する粗砂層の間に、わずかに第２トレンチで確認されたⅢ層と近似する層を確認している。

第12トレンチ～第14トレンチ

第１から第３トレンチを設定した段丘状の部分から、一段下がった水田に設定したトレンチである。いずれも、水田耕作土層の下は地山の砂層であり、遺構・遺物等については確認していない。

第15～第17トレンチ（第11図）

第12トレンチ～第14トレンチを設定した水田からさらに一段下がった水田に設定したトレンチである。第15トレンチでは、水田耕作土の下に第12トレンチ～第14トレンチ同様の砂層が確認された。第16・第17トレンチでは、褐色を呈する地山の粗砂層の上位に、やや細かい川砂の堆積が認められた。締まりが弱く、灰色がかっており、繁根木川の旧流路と判断している。遺物は近世以降の磁器小片をわずかに確認している。

7　まとめ

第２・第３トレンチで確認したステップ及び浅い溝状の遺構については、墓道として使われていた可能性を考えているが、第２・第３トレンチでの検出のみであり、確証を得るに至っていない。里道をはさんだ北側を追跡して調査する必要があるが、この部分は崖面の崩壊の可能性があり、危険が伴うため、今回の調査ではトレンチを設定しなかった。

第４トレンチについては、多量の凝灰岩転石に阻まれて完掘していない。この部分がもっとも遺構が残存している可能性が高く、条件が整えば調査範囲を拡大して、確認すべきと考えている。

第４・第７・第９トレンチにおいては、横穴墓の前面４～６ｍ程のところに凝灰岩の転石によりステップ状の段が認められる。人為的なものか否かを解明するにいたっていないが、いずれも同様の位置にあり、人為的にステップを設けている可能性が高いと考えている。第１・第６・第10・第12から第17トレンチでは、横穴群と関連する遺構等については確認することができなかった。

前庭部の構造については、近年、熊本市のつつじヶ丘横穴群の報告書が刊行され、前庭部を共有する横穴墓群として報告されており、前庭部から墓道についても詳細な調査が行われている。同様の形態を持つものとして、つつじヶ丘横穴群と同じ谷に造営されている、浦山第１横穴群がある。しかし、いずれも緩やかな傾斜地に営まれているものである。凝灰岩の崖面に営まれているものについては調査例が少なく、前庭部の構造が明らかになっているものは少なく、山鹿市の湯の口横穴群、七城町の瀬戸口横穴群などで、遺存状態の比較的良いものの一部が調査されているにすぎない。横穴墓の高さに比べ現状の地表面は低くなっており、横穴墓築造時のレベルがどの程度のものであったかを明らかにすべきであるが、その後の土地利用の過程において削平されている部分も多く、

今回の調査では明らかできなかった。第４トレンチを設定した８号墓周辺について調査範囲を拡大することにより、今後明らかにすることができるものと考えている。

横穴墓の年代については、これまで遺物が公表されておらず、形態や装飾文様の変遷から、高木正文氏（高木1983, 1985, 1999）、西住欣一郎氏（西住1980, 1981）らをはじめ先学諸氏による編年が試みられている。最新のものでは、美濃口雅朗氏の論考があり（美濃口2001）、ナギノ横穴群の出現期を６世紀初頭としている。

出土遺物については、トレンチ調査であるため少量ではあるが、横穴の年代観を考えるうえにおいて重要である。全体に大きな時期幅は認めがたく、ほぼ６世紀代後半代の所産と考えている。下限については、坏が小径化しているが、身と蓋の逆転まではいたっていないことから、６世紀代に収まると考える。限られた遺物であり、原位置を保つものがないが、横穴墓の造営については、遺物から見る限り６世紀後半代を中心とした時期と考えている。

今回の調査では、横穴群の環境に配慮して最小限のトレンチの設定に留めた。このため、十分に状況を把握するにはいたっていない。今後は、今回の成果を元に、横穴前庭部の構造の解明と年代の把握に努め、横穴群の実像に迫ることができればと考えている。

最北端に位置する未指定の44～46号墓周辺については、分布調査を行った。その結果、新たな横穴墓は確認されなかったが、46号墓から北西方向約25mの範囲については、凝灰岩の崖が埋まっており、存在の可能性は否定できない。また、最南端の48号墓から石貫穴観音横穴にかけての西側崖面では、現時点では横穴墓は確認されていないが、崖下の民家において須恵器が採集されており、横穴墓が存在する可能性がある。

石貫穴観音横穴については、最南端の5号墓が指定範囲から一部外れているとの指摘があっていたため、今回座標測量を行った。その成果を基に熊本大学作成の配置図を地籍図に重ねたところ、5号墓の南半が隣接する民地に含まれていることが明らかになった。（第13図）

今回調査を行ったナギノ横穴群前庭部部分は、横穴墓本体と不可分であり、横穴墓の保存と活用においても不可欠である。環境を保全するためにも、遺構と一体的に保護すべきものである。未指定のナギノ横穴群44～46号墓及び穴観音横穴5号墓を含め、石貫ナギノ横穴群と石貫穴観音横穴について、今後の保護と活用に向けての基礎資料の蓄積を図る方針である。

〈参考文献〉

高木正文　1985「まとめと考察」『古城横穴群』熊本県文化財調査報告第74集　熊本県教育委員会

高木正文　1985「まとめ」『福原横穴墓群』熊本県文化財調査報告第77集　熊本県教育委員会

高木正文　1999「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告第80集』国立歴史民俗博物館

西住欣一郎・宮本千絵　1980「まとめ」『石貫ナギノ・石貫穴観音横穴群』金曜会

西住欣一郎　1981「横穴墓天井構造に関する試論」『赤れんが』創刊号　赤れんが刊行会

西住欣一郎　1991「肥後における横穴墓について」『大分考古』第４集　大分県考古学会

美濃口雅朗　2001「地域の概要-肥後-」『九州の横穴墓と地下式横穴墓　第１分冊』九州古墳時代研究会

1　トレンチ土層説明

Ⅰ　砕石・山砂

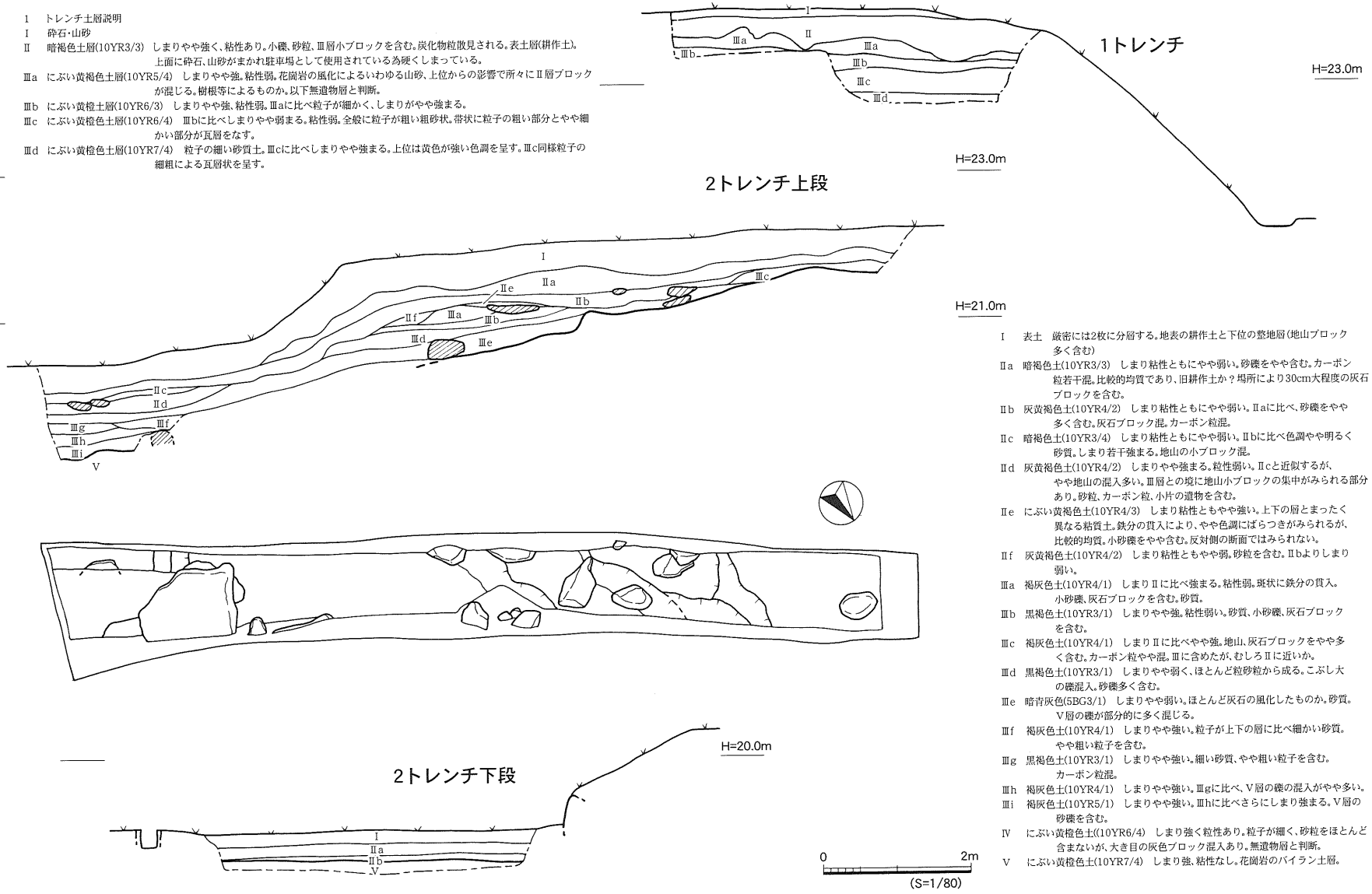
Ⅱ　暗褐色土層(10YR3/3)　しまりやや強く、粘性あり。小礫、砂粒、Ⅲ層小ブロックを含む。炭化物粒散見される。表土層(耕作土)。上面に砕石、山砂がまかれ駐車場として使用されている為硬くしまっている。

Ⅲa　にぶい黄褐色土層(10YR5/4)　しまりやや強。粘性弱。花崗岩の風化によるいわゆる山砂、上位からの影響で所々にⅡ層ブロックが混じる。樹根等によるものか。以下無遺物層と判断。

Ⅲb　にぶい黄橙土層(10YR6/3)　しまりやや強、粘性弱。Ⅲaに比べ粒子が細かく、しまりがやや強まる。

Ⅲc　にぶい黄橙色土層(10YR6/4)　Ⅲbに比べしまりやや弱まる。粘性弱。全般に粒子が粗い粗砂状。帯状に粒子の粗い部分とやや細かい部分が瓦層をなす。

Ⅲd　にぶい黄橙色土層(10YR7/4)　粒子の細い砂質土。Ⅲcに比べしまりやや強まる。上位は黄色が強い色調を呈す。Ⅲc同様粒子の細粗による瓦層状を呈す。



Ⅰ　表土　厳密には2枚に分層する。地表の耕作土と下位の整地層(地山ブロック多く含む)

Ⅱa　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性ともにやや弱い。砂礫をやや含む。カーボン粒若干混。比較的均質であり、旧耕作土か？場所により30cm大程度の灰石ブロックを含む。

Ⅱb　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり粘性ともにやや弱い。Ⅱaに比べ、砂礫をやや多く含む。灰石ブロック混。カーボン粒混。

Ⅱc　暗褐色土(10YR3/4)　しまり粘性ともにやや弱い。Ⅱbに比べ色調やや明るく砂質。しまり若干強まる。地山の小ブロック混。

Ⅱd　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや強まる。粒性弱い。Ⅱcと近似するが、やや地山の混入多い。Ⅲ層との境に地山小ブロックの集中がみられる部分あり。砂粒、カーボン粒、小片の遺物を含む。

Ⅱe　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり粘性ともやや強い。上下の層とまったく異なる粘質土。鉄分の貫入により、やや色調にばらつきがみられるが、比較的均質。小砂礫をやや含む。反対側の断面ではみられない。

Ⅱf　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり粘性ともやや弱。砂粒を含む。Ⅱbよりしまり弱い。

Ⅲa　褐灰色土(10YR4/1)　しまりⅡに比べ強まる。粘性弱。斑状に鉄分の貫入。小砂礫、灰石ブロックを含む。砂質。

Ⅲb　黒褐色土(10YR3/1)　しまりやや強。粘性弱い。砂質、小砂礫、灰石ブロックを含む。

Ⅲc　褐灰色土(10YR4/1)　しまりⅡに比べやや強。地山、灰石ブロックをやや多く含む。カーボン粒やや混。Ⅲに含めたが、むしろⅡに近いか。

Ⅲd　黒褐色土(10YR3/1)　しまりやや弱く、ほとんど粒砂粒から成る。こぶし大の礫混入。砂礫多く含む。

Ⅲe　暗青灰色(5BG3/1)　しまりやや弱い。ほとんど灰石の風化したものか。砂質。Ⅴ層の礫が部分的に多く混じる。

Ⅲf　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強い。粒子が上下の層に比べ細かい砂質。やや粗い粒子を含む。

Ⅲg　黒褐色土(10YR3/1)　しまりやや強い。細い砂質、やや粗い粒子を含む。カーボン粒混。

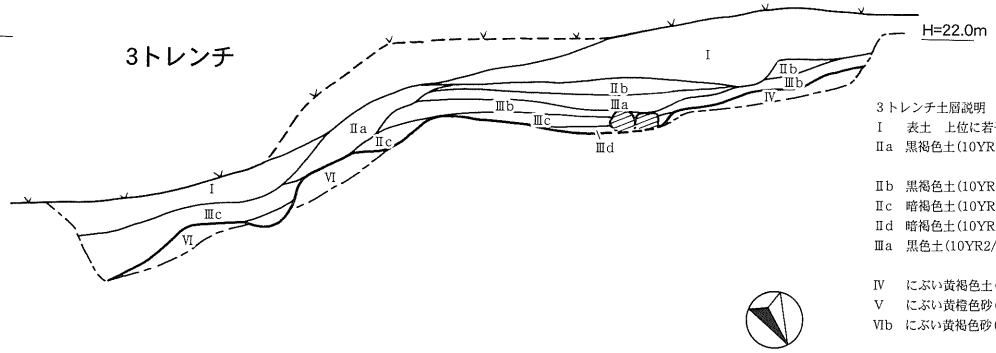
Ⅲh　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強い。Ⅲgに比べ、Ⅴ層の礫の混入がやや多い。

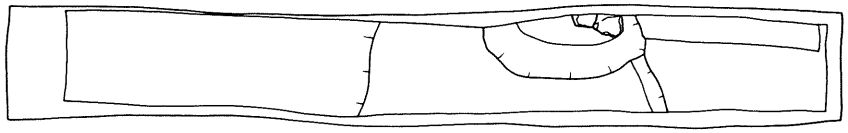
Ⅲi　褐灰色土(10YR5/1)　しまりやや強い。Ⅲhに比べさらにしまり強まる。Ⅴ層の砂礫を含む。

Ⅳ　にぶい黄橙色土((10YR6/4)　しまり強く粒性あり。粒子が細く、砂粒をほとんど含まないが、大き目の灰色ブロック混入あり。無遺物層と判断。

Ⅴ　にぶい黄橙色土(10YR7/4)　しまり強、粘性なし。花崗岩のバイラン土層。

第6図　確認調査トレンチ実測図（1T，2T）





3トレンチ土層説明

Ⅰ　表土　上位に若干の腐食土。その下は、にぶい黄褐色土(10YR5/4)（Ⅳ層に近似）を主体とする盛土。山側の里道を掘削した際のものか。

Ⅱa　黒褐色土(10YR3/2)　しまり粘性とも弱い。Ⅱ層についてはⅡa～Ⅱdいずれもほとんど変わりなし。若干の混入物の違いとしまりの強弱により分層。近世～近代の陶磁器が含まれており、Ⅰ層が盛土される前の表土とみられる。古墳時代の土器片が散見される。

Ⅱb　黒褐色土(10YR3/2)　しまり粘性とも弱い。Ⅳ層以下の小ブロック、灰岩の小片、小砂礫を含む。Ⅲ層の混入の為、若干黒っぽくみえる部分あり。

Ⅱc　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性とも弱い。多量の大小凝灰岩を含む。

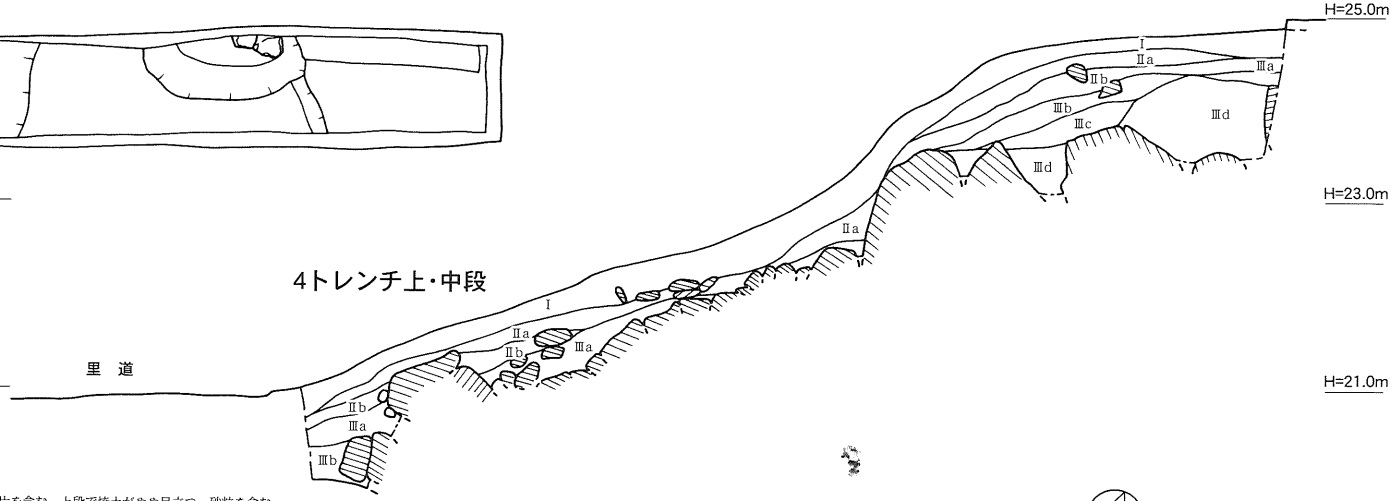
Ⅱd　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性とも弱いが、Ⅱa・Ⅱcに比べるとややしまり強い。下位の粗砂粒を多く含む。

Ⅲa　黒色土(10YR2/1)　しまりやや強。粘性弱。軟質の凝灰岩の大小片をやや多く含む。Ⅳ層以下のブロック、砂礫をやや含む。２下では凝灰岩片を多量に含む。古墳時代の土器を含む。後世の陶磁器等は未確認。

Ⅳ　にぶい黄褐色土(10YR5/3～4)　しまり粘性ともやや強い。粘土層。部分的に灰黄褐色(10YR5/2)を呈す。砂粒をやや含む。以下無遺物層と判断。

Ⅴ　にぶい黄橙色砂(10YR6/3)　しまり強、粘性弱。砂層。鉄分の貫入が上位にみられ、この部分は赤サビ色を呈する。粒子細。

Ⅵb　にぶい黄褐色砂(10YR5/3)　しまり強。粘性弱。粗い砂層。山砂の二次的な堆積か。上位に礫層あり(Ⅵa)



4トレンチ上～中段土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱa　黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや強。粘性やや弱。砂礫をやや含む。全般に混入物少なく、灰石片も上段では少ない（下段はやや多）

Ⅱb　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまり粘性ともやや強く、他の層とは異質。粒子細い。鉄分が斑状に貫入しており、元来灰褐色か。丘陵上から流れ落ちたものか。やや粒子粗く、灰石が風化したものか。上段では灰石片の混入ほとんどなし。

Ⅲb　黒褐色土(10YR3/1)　しまり強。粘性やや弱い。灰石の風化土、灰石片を含む。上段で焼土がやや目立つ。砂粒を含む。

Ⅲc　黒褐色土(10YR3/2)　Ⅲbと大きく変わらないが、しまりがさらに強。黄褐色土の小ブロック、灰石片を含む。

Ⅲd　暗褐色土(10YR3/3)　Ⅲcと大きく変わらないが、しまりがさらに強固。Ⅲb～Ⅲdは元来灰褐色(10YR4/1)とみられるが、鉄分の貫入のため変色したものか。実際は黒～暗褐色の部分が中にⅣ褐色の部分あり。灰石が風化したものか。

4トレンチ下段土層説明

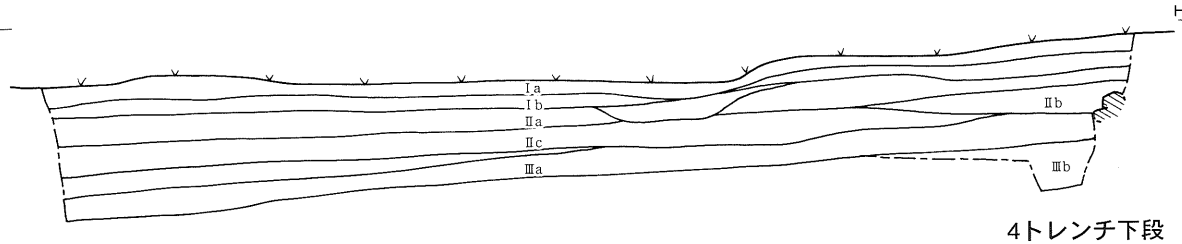
Ⅲa　青黒色土(10BG2/1)
しまり弱く砂質。凝灰岩の小片を含む。ヘドロ状のにおいを発する。遺物については未確認。

Ⅲb　青黒色土(10BG2/1)
Ⅲaよりやや粗い砂礫層。トレンチ西端部で一部深堀により確認。礫は小児の拳大程度。
しまりやや弱いことから、2次堆積の可能性あり。

※下段のⅢa・Ⅲbとしたものは、ほぼ上段のものに近似するが、しまりがやや弱く（上段に比べ）遺物（古墳）・灰石の塊を多量に含む。

0　2m
(S=1/80)

第7図　確認調査トレンチ実測図(3T,4T)



4トレンチ下段

4トレンチ下段土層説明

Ⅲa　青黒色土(10BG2/1)
　しまり弱く砂質。凝灰岩の小片を含む。ヘドロ状のにおいを発する。遺物については未確認。

Ⅲb　青黒色土(10BG2/1)
　Ⅲaよりやや粗い砂礫層。トレンチ西端部で一部深掘により確認。礫は小児の掌大程度。
　しまりやや弱いことから、2次堆積の可能性あり。

※下段のⅢa・Ⅲbとしたものは、ほぼ上段のものに近似するが、しまりがやや弱く（上段に比べ）遺物（古墳）・灰石の塊を多量に含む。

5トレンチ上～中段土層説明

A　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや弱。粘性弱。砂質。凝灰岩の破片（10～20cm大）を非常に多く含む。古墳時代の土器を多く出土しているが、中世以降の遺物混。

Ⅱd　黒褐色土(10YR3/2)　しまり粘性とも弱い。凝灰岩の風化によるものか、やや明るい暗褐色土の混入あり。

Ⅲg'　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強。粘性弱い。凝灰岩の風化によるものか。暗褐色土粒子、小ブロック混あり。遺物等ほとんど含まず。

V　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　しまりやや強く、粘性弱い。凝灰岩もほぼ同じ色調を呈しており、ほとんど見分けつかず。

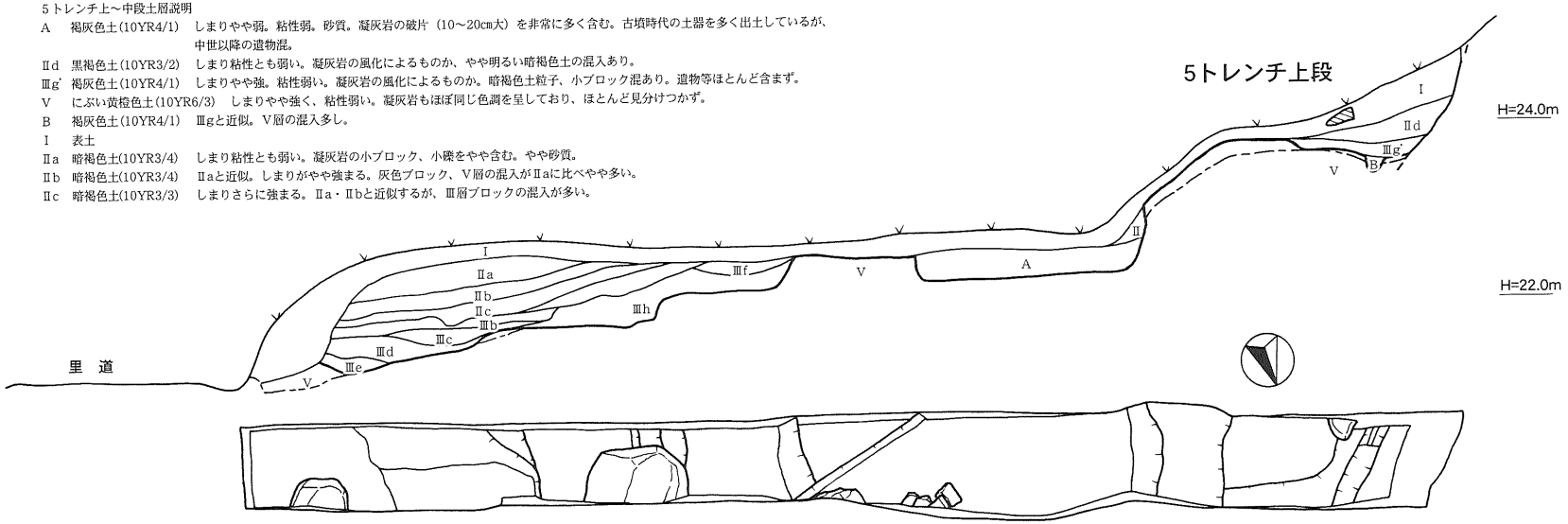
B　褐灰色土(10YR4/1)　Ⅲgと近似。V層の混入多し。

Ⅰ　表土

Ⅱa　暗褐色土(10YR3/4)　しまり粘性とも弱い。凝灰岩の小ブロック、小礫をやや含む。やや砂質。

Ⅱb　暗褐色土(10YR3/4)　Ⅱaと近似。しまりがやや強まる。灰色ブロック、V層の混入がⅡaに比べやや多い。

Ⅱc　暗褐色土(10YR3/3)　しまりさらに強まる。Ⅱa・Ⅱbと近似するが、Ⅲ層ブロックの混入が多い。



Ⅲa　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強。粘性弱。砂質、鉄分が斑状に貫入する。小礫、灰色小ブロックの混入ややあり。

Ⅲb　褐灰色土(10YR4/1)　色調はⅢaと変わらず、Ⅲaに比べややしまり弱い。粗砂、Ⅳブロック、小礫の混入がやや多い。

Ⅲc　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強。粘性弱。砂質。Ⅲa・bに比べ粒子が細くしまっている。砂礫をやや含む。部分的にⅣ層の混入が目立つ。さらに分層も可。

Ⅲd　灰黄色土(10YR6/2)　しまりやや強。粘性弱。砂質、Ⅲdに近似。Ⅲc～Ⅲeについてはレンズ状の堆積であり、さらに分層も可能。内容物は変わらず。

Ⅲe　褐灰色土(10YR4/1)　基本的にはⅢcと大差なし。V層の混入がみられる。

Ⅲf　褐灰色土(10YR4/1)　しまりやや強。粘性弱。Ⅲaと近似するが、しまり若干強め。

Ⅲh　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり強（移植ゴテでは歯がたたない）粘性やや弱く砂質。暗褐色ブロック。砂礫を含む。灰石ブロック混。粒子はやや小さめ。

V　にぶい黄橙色(10YR6/3)　しまり強、粘性なし。山砂、5cm前後の礫を含む。

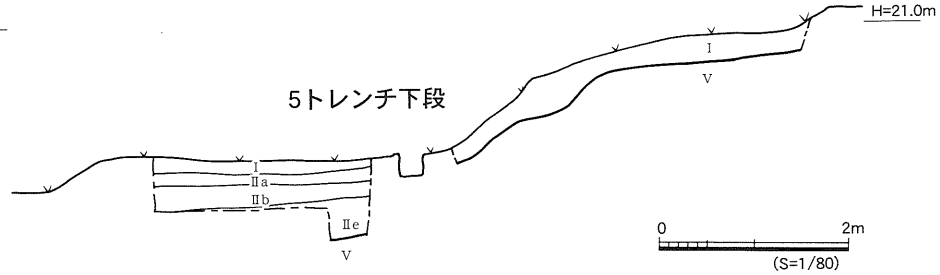
5トレンチ下段土層説明

Ⅰ　耕作土

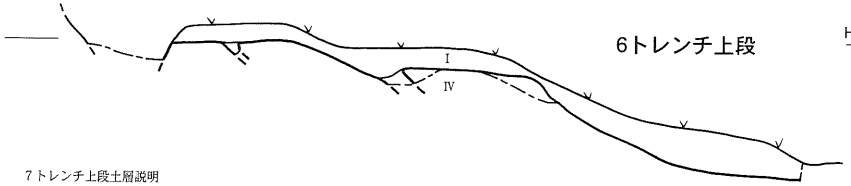
Ⅱa　暗緑灰色(10GY3/1)　粘性弱く砂質。ややしまり強。水田床土。V層粒を多く含む。グライ化。

Ⅱb　灰黄褐色(10YR5/1)　粘性ややあり、しまりやや弱い。V層粒子を多く含む。グライ化しているが、鉄分の貫入著しく、黄、赤味が強くなっている。

Ⅱc　暗青灰色(5BG4/1)　粘性やや弱く、細砂質。V層の混入少ない。目立った混入物はみられず、湧水の為、すぐに水没し、細かい観察不可。



第8図　確認調査トレンチ実測図(4T,5T)



6トレンチ土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱ　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや強く粘性あり。砂粒をやや多く含む。斑状に鉄分貫入。凝灰岩の小ブロックを含む。

Ⅳ　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　しまりやや強。粘性弱い。砂質土。

Ⅴ　にぶい黄橙色土(10YR6/3)　しまりやや強。粘性弱い。山砂層。上位にやや乱れあり。また特に下段では鉄分の貫入著しい。5㎝前後～20cm大の礫を多く含む(上位)。下段のレベルでは礫の混入はほとんどみられず。

7トレンチ上段土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱ　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性ともやや弱。里道に近い側では、特に多量の灰石小片を含む。砂粒を含む。

Ⅲa　黒褐色土(10YR3/1)　しまりやや強。粘性弱。大量の灰石小片を含み、ほとんど灰色とその風化した砂質土から成る。Ⅲとしたが、Ⅱに近い。

Ⅲb　黒色土(10YR2/1)　しまり粘性ともやや弱い。やや粒子が粗く、大粒の砂粒を含む。灰色の小片を含む。

Ⅲc　褐灰色土(10YR4/)　しまり粘性ともやや弱い。Ⅲbに近似するが、Ⅱbほど粒子は粗くない。灰石片を含むが、やや大きめで、量は少ない。部分的に、粒子の粗い暗褐色土小ブロック混。

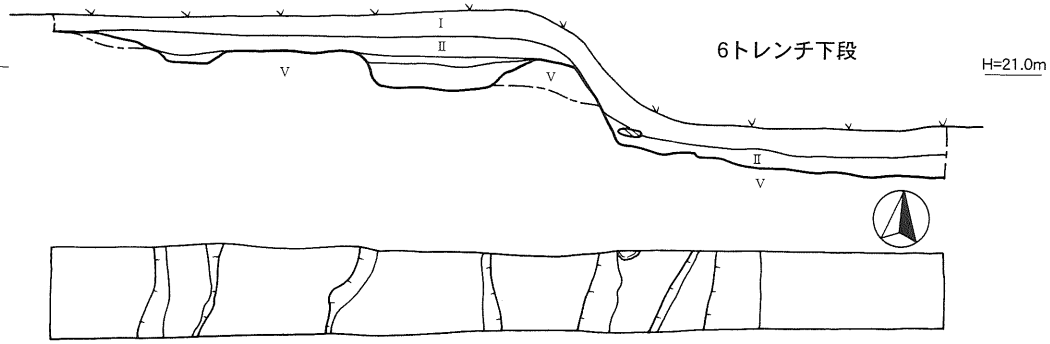
Ⅲd　黒褐色土(10YR3/1)　しまりややあり、粘性弱い。Ⅲbに近似するも、ややしまり強く、Ⅳ層の小ブロックを含む。

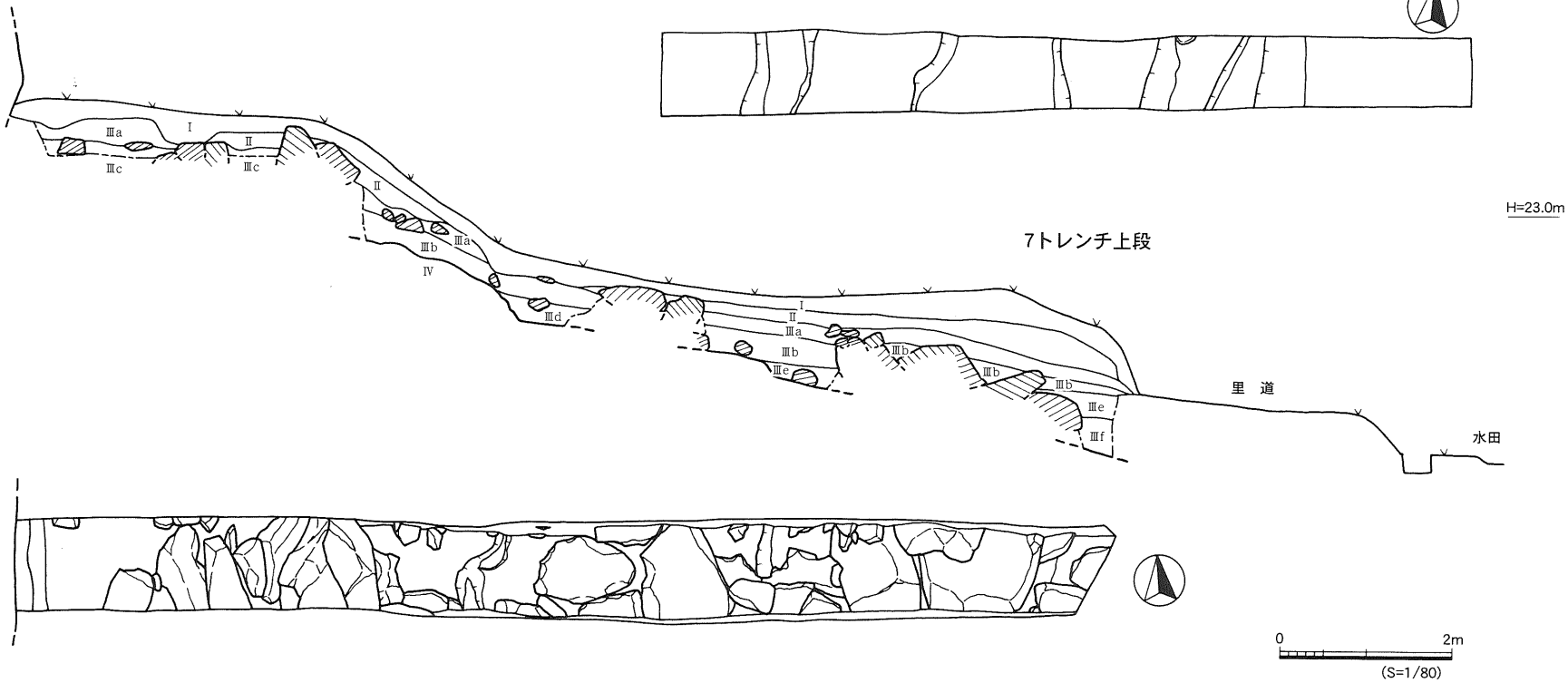
Ⅲe　褐灰色土(10YR4/1)　しまり粘性ともやや弱いが、上位に比べ強まる。Ⅲbに比べ粒子が細い。灰石小片を含むがやや少なめ。

Ⅲf　暗青灰色土(5BG4/1)　しまりやや強まる。粘性弱い。Ⅲeと大きく変わらないが、粒砂粒（Ⅴ層）をやや多く含む。

Ⅳ　にぶい黄橙色土(10YR6/4)　しまりやや強。粘性弱。地山、粒子粗く、小砂礫を若干含む。

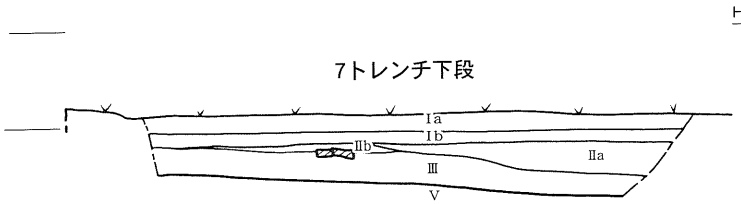
Ⅴ　明黄褐色土(10YR6/6)　しまりやや強。粘性弱。花崗岩、バイラン土。





第9図　確認調査トレンチ実測図(6T,7T)

7トレンチ下段



7トレンチ下段土層説明

Ⅰa　現耕作土

Ⅰb　褐灰色土(10YR4/1)　しまりややあり、粘性弱。水田の床土。粗砂粒の混入多。鉄分の貫入の為、色調は場所により(とくに東側)は赤サビ色を呈する。
ⅠaとⅡa・Ⅲbの間に砂の堆積がうすくみられる。

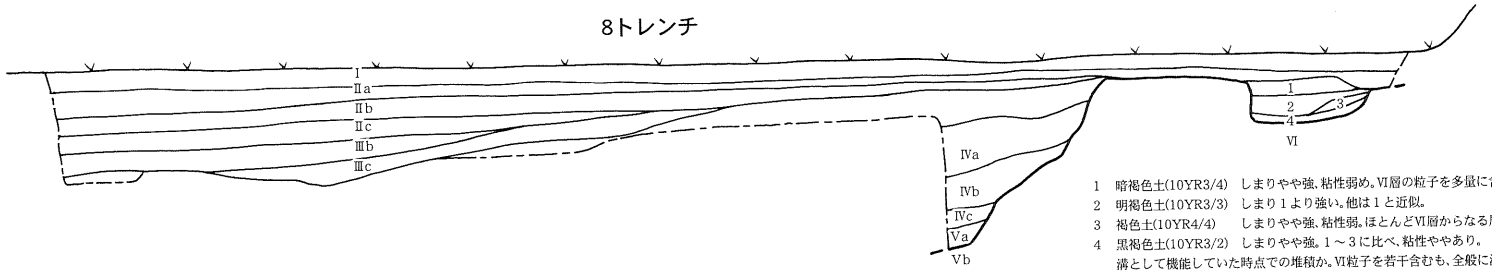
Ⅱa　暗青灰色(5B4/1)　しまり、Ⅰbより弱い。砂質で粘性弱。Ⅰbとした層と大差ないようにみえるが、鉄分の貫入少ない。

Ⅱb　暗青灰色(5B3/1)　Ⅱaに近似するが、色調やや暗く粗砂を多く含む。

Ⅲ　褐灰色土(10YR5/1)　Ⅱに比べしまり強まる。Ⅴ層粒及び小礫を多く含む。灰石片、土器片をやや含む。とくに下位に礫等多く、分層できないことはない。
鉄分が柱状に貫入、若干のカーボン粒含む。

Ⅴ　褐灰色砂(10YR4/1)　花崗岩のバイラン土、本来は黄橙色とみられるが、還元の為灰色を呈す。しまり強、粘性弱。

8トレンチ



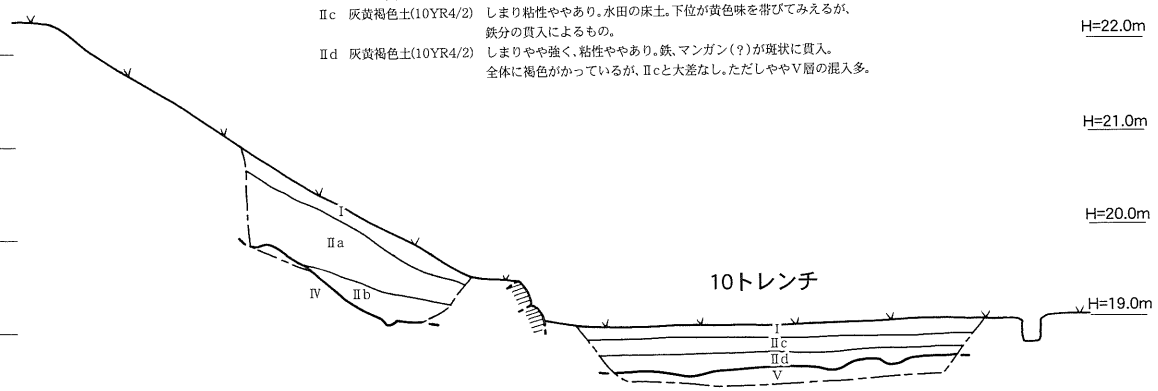
1　暗褐色土(10YR3/4)　しまりやや強、粘性弱め。Ⅵ層の粒子を多量に含む。

2　明褐色土(10YR3/3)　しまり1より強い。他は1と近似。

3　褐色土(10YR4/4)　しまりやや強、粘性弱。ほとんどⅥ層からなる層。小礫を含む。

4　黒褐色土(10YR3/2)　しまりやや強。1～3に比べ、粘性ややあり。
溝として機能していた時点での堆積か。Ⅵ粒子を若干含むも、全般に混入物少ない。
炭化物粒を若干含む。

10トレンチ



10トレンチ土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱa　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性ともややあり。小礫、カーボン粒等をふくむが、比較的均質。

Ⅱb　暗褐色土(10YR3/4)　しまり粘性ともⅡaに比べ、やや強い。内容はⅡaと大差なし。

Ⅳ　にぶい黄褐色土(10YR5/4)　しまり粘性ともやや弱い。細砂質、無遺物層と判断。

Ⅱc　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまり粘性ややあり。水田の床土。下位が黄色味を帯びてみえるが、
鉄分の貫入によるもの。

Ⅱd　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや強く、粘性ややあり。鉄、マンガン(?)が斑状に貫入。
全体に褐色がかっているが、Ⅱcと大差なし。ただしややⅤ層の混入多。

8トレンチ土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱa　暗褐色土(10YR3/4)　しまり粘性ともやや弱い。Ⅵ層粒子を含む。凝灰岩小片を含む。

Ⅱb　暗褐色土(10YR3/3)　しまりやや強まる。粘性やや弱。

Ⅱc　暗褐色土(10YR3/3)　しまりさらに強まる。

Ⅲa　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性ともやや強い。Ⅱに比べ、粒子が細かく粘性を帯びる。
内容物はⅡと大差なし。

Ⅲb　黒褐色土(10YR3/2)　Ⅲaに比べ色調が黒っぽくなり、しまりが若干弱い他は、Ⅲaと大差なし。

Ⅳa　褐色土(10YR4/6)　しまり粘性ともやや強い。黄褐色土及びⅥ層が混在。小礫を含む。遺物未確認。

Ⅳb　褐色土(10YR4/6)　しまりやや強い。粘性はⅣaに比べ、弱まる。砂粒を多く含む。

Ⅳc　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　しまりやや強い。粘性やや弱。砂粒を多く含む(Ⅵ層か)
ⅣaⅣbに比べ均質。

Ⅴa　灰黄褐色土(10YR5/2)　しまりやや弱い。粘性ややあり。にぶい黄橙色(10YR6/4)の大きめの
ブロックが混入。

Ⅴb　褐灰色土(10YR5/1)　しまり粘性ともやや弱い。粒子やや粗い。にぶい黄橙色～黄褐色の
小ブロックやや混入するも観察した限りでは混入物はほとんどなく均質。

Ⅵ　明黄褐色土(10YR6/6)　しまり強く、粘性弱い。いわゆる山砂。
Ⅱ層～近代の耕作土
Ⅲ層～Ⅱ層以前の耕作土か。
Ⅳ層～丘陵上からの土砂くずれにともなうものか。
Ⅴ層～Ⅳ層形成前の堆積土。

0　2m
(S=1/80)

第10図　確認調査トレンチ実測図(7T,8T,10T)

11トレンチ土層説明

Ⅰa　表土

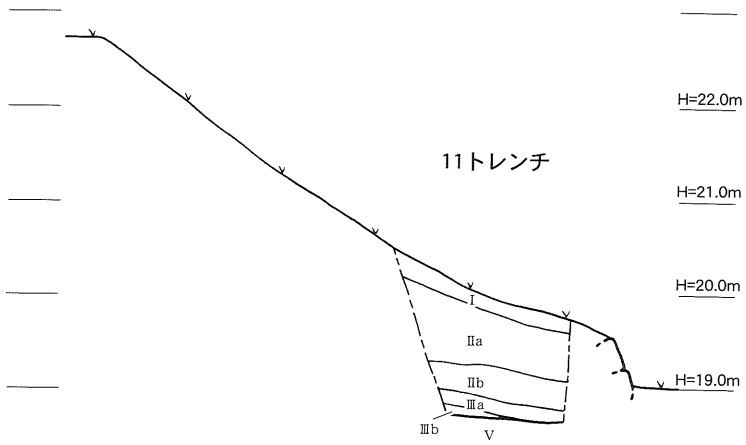
Ⅰb　暗褐色土(10YR3/4)　しまり粘性弱い。にぶい橙(10YR7/4)ブロック多量に混入。灰石片をやや含む。

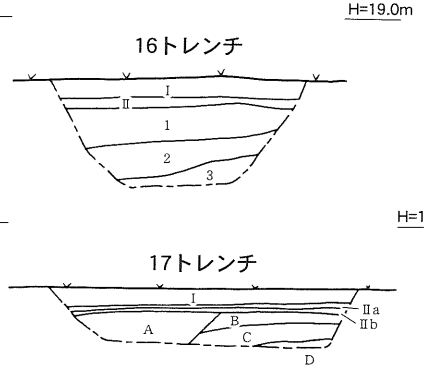
Ⅱa　暗褐色土(10YR3/3)　しまり粘性ともやや弱い。灰石片若干混じる。炭化物粒混。砂粒をやや含む。均質。

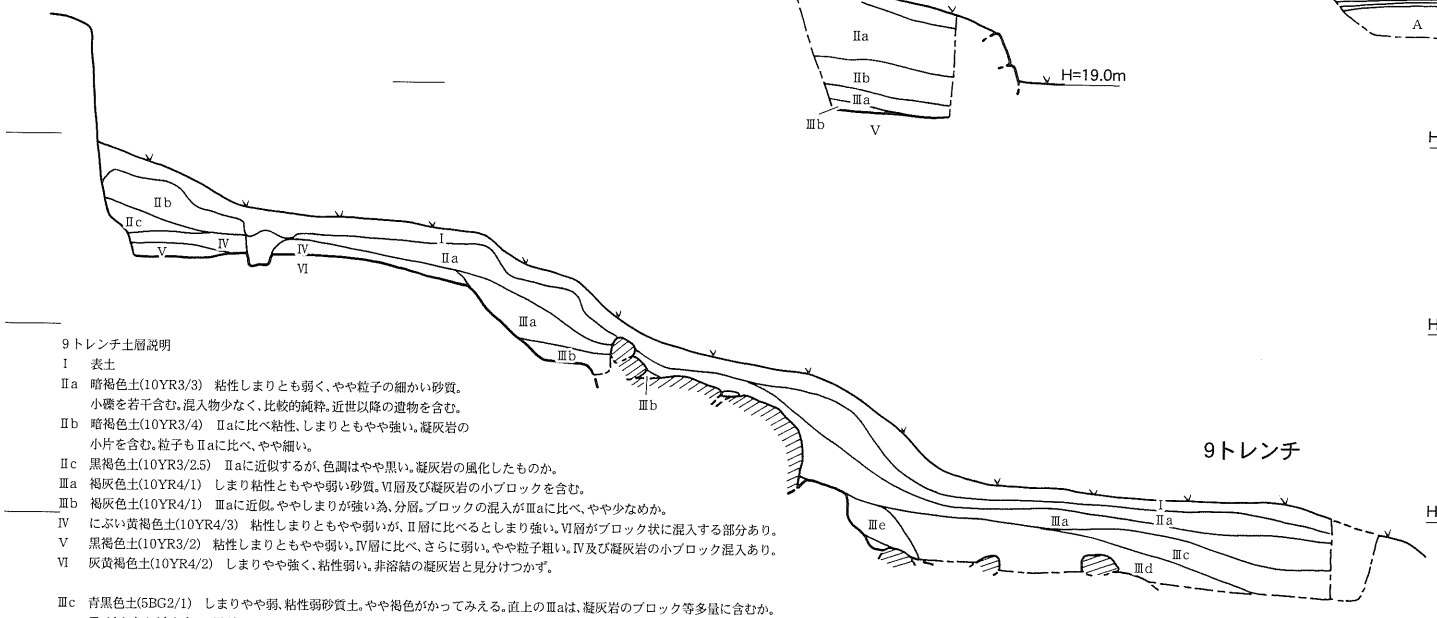
Ⅲa　暗褐色土(10YR4/1)　Ⅱに比べしまり強。やや粘性弱。灰石片若干混じる。砂粒をやや多く含む。

Ⅲb　暗褐色土(10YR3/3)　しまりさらに強まり、やや粘性を有す。粗砂粒の混入、Ⅲaに比べ多い。鉄分の貫入により、色調が赤っぽく見えるが、本来は還元の為、Ⅲaに近い。

Ⅳ　橙色土(10YR7/6)　しまり強。粘性弱い。花崗岩、バイラン土。







16トレンチ土層説明

Ⅰ　耕作土

Ⅱ　灰褐色土(10YR4/2)
しまり粘性ややあり。砂粒を含む。水田床土。

1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)
しまりやや強。粘性弱。やや粗い砂質。
鉄分が斑状に貫入。カーボン粒の混入あり。

2　灰黄褐色土(10YR5/2)
しまりやや強。粘性弱。細砂質。鉄分が著しく斑状に貫入。
粗砂がレンズ状にはいる部分が多い。

3　灰黄褐色土(10YR5/2)
しまりやや弱。粘性あり。粒子が細かい、細砂質。
部分的に粗砂がレンズ状に入る。鉄分貫入。

17トレンチ土層説明

Ⅰ　耕作土

Ⅱa　にぶい灰黄褐色土(10YR4/3)　しまり粘性ややあり。水田床土。

Ⅱb　黄褐色土(10YR5/6)　しまりややあり。粘性弱い。
3にやや粒子の細かい土が混じった状態。

1　にぶい黄褐色土(10YR5/3)　しまりやや強。粘性弱い。
粗い砂の堆積(花崗岩バイラン土)

A　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりややあり、1に比べやや粒子の細かい砂の堆積。

B　灰黄褐色土(10YR4/2)　Aと大差ないが、ややしまり強い。

C　にぶい褐色土(10YR4/3)　しまりBに比べやや弱い。
1に近いやや粗い砂の堆積。

9トレンチ土層説明

Ⅰ　表土

Ⅱa　暗褐色土(10YR3/3)　粘性しまりとも弱く、やや粒子の細かい砂質。
小礫を若干含む。混入物少なく、比較的純粋。近世以降の遺物を含む。

Ⅱb　暗褐色土(10YR3/4)　Ⅱaに比べ粘性、しまりともやや強い。凝灰岩の小片を含む。粒子もⅡaに比べ、やや細い。

Ⅱc　黒褐色土(10YR3/2.5)　Ⅱaに近似するが、色調はやや黒い。凝灰岩の風化したものか。

Ⅲa　褐灰色土(10YR4/1)　しまり粘性ともやや弱い砂質。Ⅵ層及び凝灰岩の小ブロックを含む。

Ⅲb　褐灰色土(10YR4/1)　Ⅲaに近似。ややしまりが強い為、分層。ブロックの混入がⅢaに比べ、やや少なめか。

Ⅳ　にぶい黄褐色土(10YR4/3)　粘性しまりともやや弱いが、Ⅱ層に比べるとしまり強い。Ⅵ層がブロック状に混入する部分あり。

Ⅴ　黒褐色土(10YR3/2)　粘性しまりともやや弱い。Ⅳ層に比べ、さらに弱い。やや粒子粗い。Ⅳ及び凝灰岩の小ブロック混入あり。

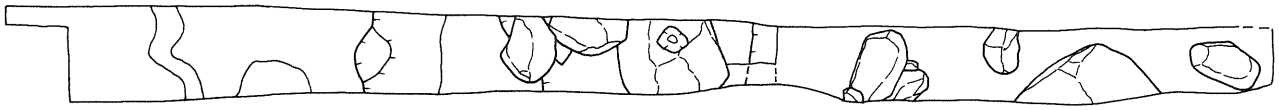
Ⅵ　灰黄褐色土(10YR4/2)　しまりやや強く、粘性弱い。非溶結の凝灰岩と見分けつかず。

Ⅲc　青黒色土(5BG2/1)　しまりやや弱、粘性弱砂質土。やや褐色がかってみえる。直上のⅢaは、凝灰岩のブロック等多量に含むか。
Ⅲcはかなり減少する。場所により多少しまりあり、にぶい黄褐色～灰白色粒子混。

Ⅲd　青黒色土(5BG2/1)　色調はⅢcと大差ないが、多少黒っぽくみえる。しまりはⅢcよりやや強め。凝灰岩のブロックをやや多く含む。

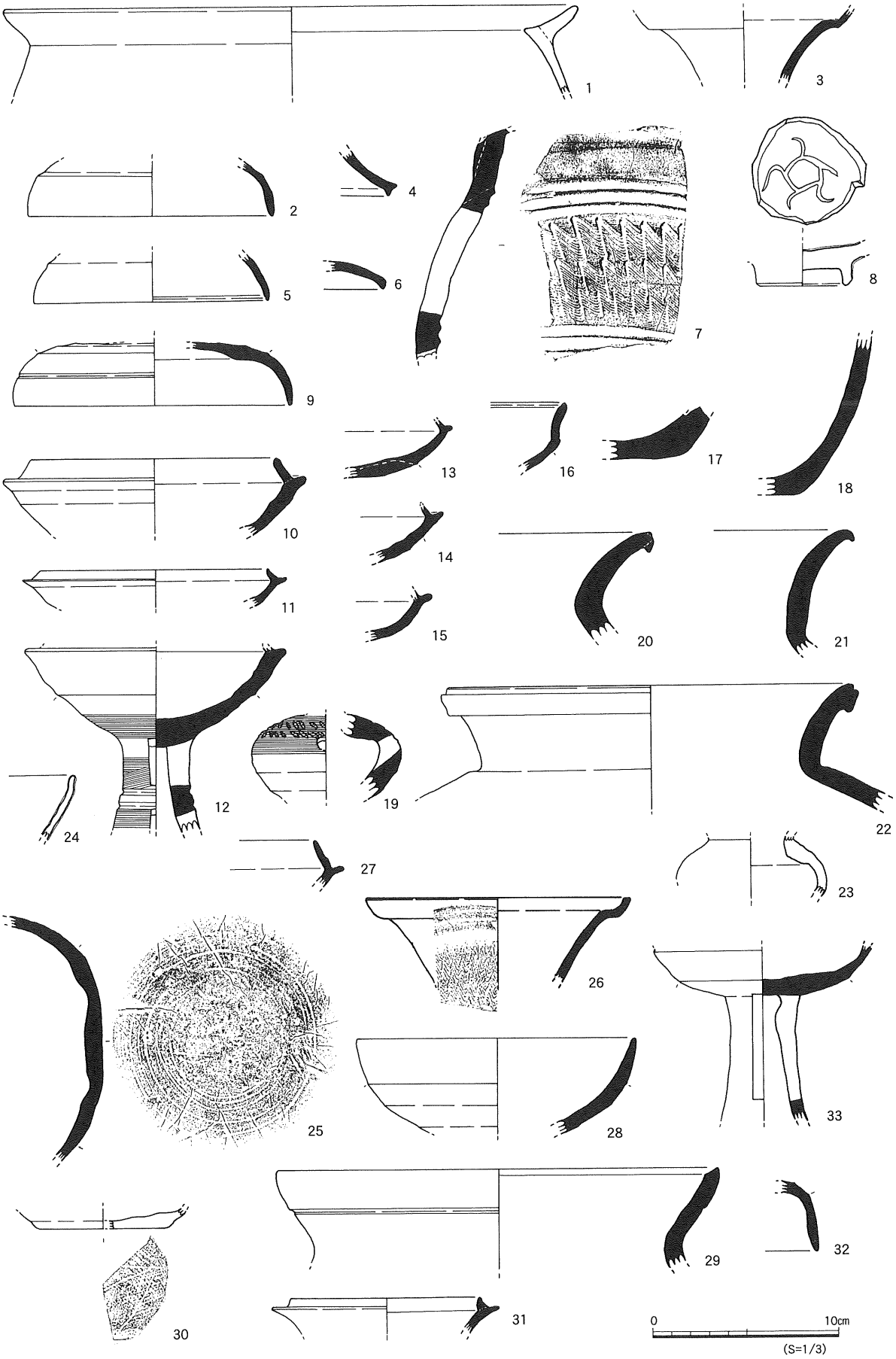
Ⅲe　暗青灰色土(5BG3/1)　ⅢcⅢdに比べ、しまりやや強い砂質土。暗褐色土ブロックを多く含み、全体に褐色がかってみえる。凝灰岩の小ブロックやや混入。

Ⅲd　青黒色土(5BG2/1)　しまり粘性とも弱い。やや粗い砂質土。上位に比べ砂の粒子が均質でない。地山の混入とみられる。



0　2m
(S=1/80)

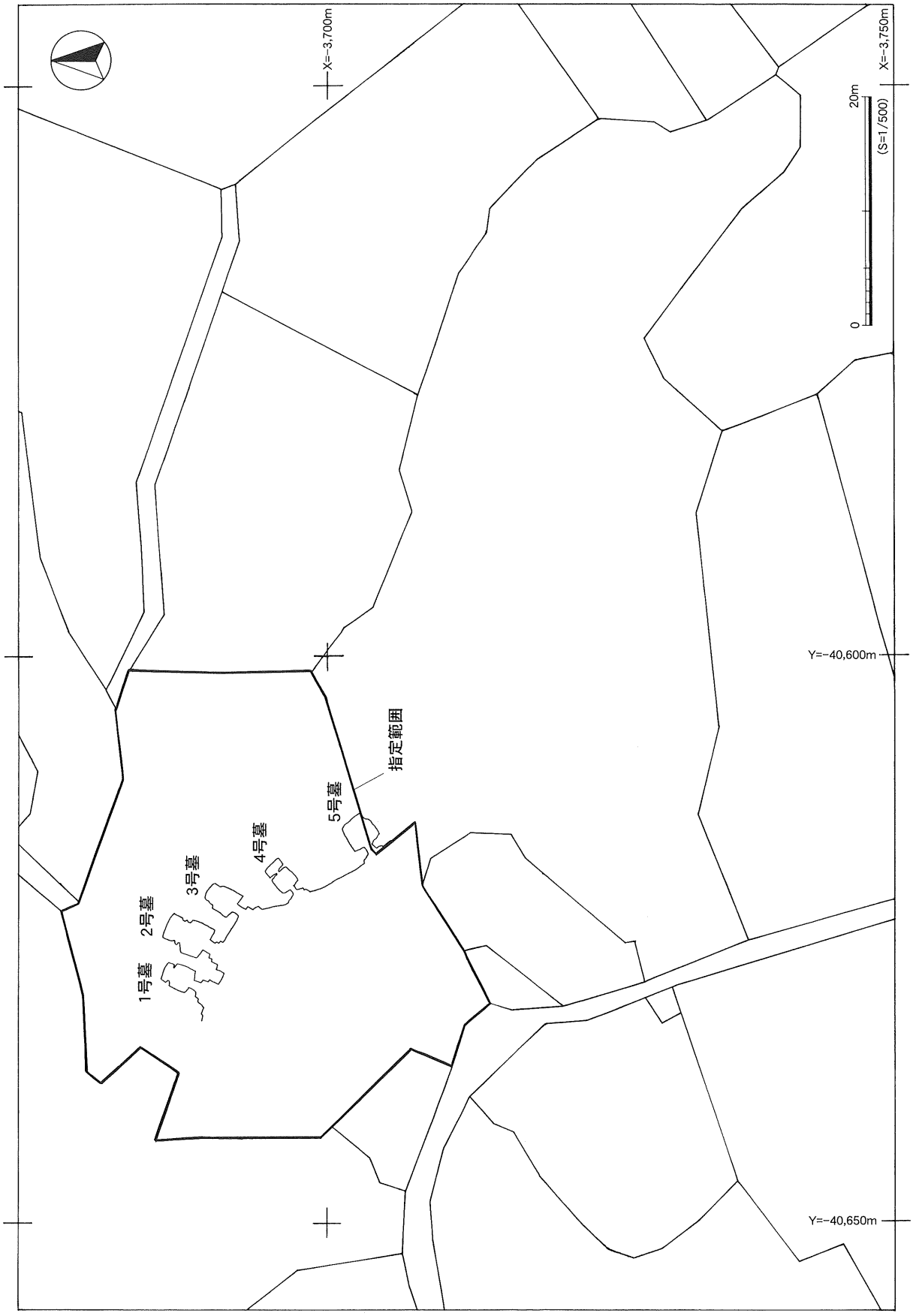
第11図　確認調査トレンチ実測図(9T,11T,16T,17T)



第12図　出土遺物実測図

図版番号	実測番号	出土地点	種類	器種	部位	口径	底径	器高	調整(外)	調整(内)	色調(外)	色調(内)	胎　土	焼成	備　考
1	1	2TⅢ層	弥生土器	甕	口縁	(30.4)	-	(4.6)	不明	不明	灰黄2.5Y7/2	灰黄色2.5Y7/2	1mm以下の砂粒含む	普通	
2	2	2TⅢ層	須恵器	坏蓋	口縁	(13.0)	-	(2.9)	回転ナデ	回転ナデ	明赤褐5YR5/6	灰褐色(5YR4/2)	0.5mm以下の白色砂粒含む	良	
3	27	4T上Ⅲ層	須恵器	瓶	頸部	-	-	(3.7)	回転ナデ	回転ナデ	灰10Y4/1	暗灰黄色2.5Y5/2	0.5mm以下の白色粒僅かに含む	良	
4	20	4T上Ⅲ層	須恵器	高坏	底部	-	-	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	橙5YR6/8	橙5YR6/8	0.5mm以下の白色粒ごく僅かに含む	普通	
5	3	4T中Ⅱ層	須恵器	坏蓋	口縁	(12.4)	-	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR6/4	1mm以下の砂粒含む	普通	
6	18	4T中Ⅱ層	須恵器	坏蓋	口縁	-	-	(1.5)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰5GR6/1	灰白N5/	0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
7	31	4T中Ⅱ層	須恵器	器台	胴部	-	-	(12.1)	回転ナデ	ナデ	褐灰10YR6/1	灰黄褐10YR5/2	0.5mm程の黒色粒少量含む	良	
8	24	4T上Ⅱ層	青磁	碗	底部	-	5.0	(2·3)	-	-	(胎土)灰N6/	(釉)明緑灰10GY7/1	緻密	良	
9	7	4T中Ⅱ層	須恵器	坏蓋	口～胴	(14.8)	-	(3.3)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白7.5Y7/1	灰白7.5Y7/1	1mm以下の長石,石英含む	普通	
10	9	4T中Ⅲ層	須恵器	坏身	口～胴	(13.3)	-	(3.9)	回転ナデ	回転ナデ	褐灰色5YR6/1	灰褐色(5YR5/2)	0.2mm以下の白色粒ごく僅かに含む	良	
11	5	4T下Ⅱ·Ⅲ層	須恵器	坏身	口縁	(12.0)	-	(2.0)	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰5BG3/1	暗青灰色5BG3/1	0.3mm以下の長石少量含む	良	
12	32	4T中Ⅲ層	須恵器	高坏	胴～脚	-	-	(9.6)	回転ヘラケズリ	ナデ	灰褐5YR4/2	褐灰5YR5/1	0.5mm以下の白色粒ごく僅かに含む	良	外面にカキ目
13	25	4T下Ⅱ·Ⅲ層	須恵器	坏身	胴～底	-	-	(2.7)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰N6/	灰N6/	0.5m前後の白色粒ごく僅かに含む	良	
14	29	4T下Ⅱ·Ⅲ層	須恵器	坏身	口～胴	-	-	(2.7)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	褐灰色7.5YR4/1	灰褐2.5YR4/2	1mm以下の砂粒含む	良	
15	26	4T中Ⅱ層	須恵器	坏身	胴部	-	-	(2.4)	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ灰2.5GYN5/1	灰N5/	1mm以下の砂粒含む	良	
16	17	4T下Ⅱ·Ⅲ層	須恵器	高坏	口縁	-	-	(3.6)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰N5/	灰N5/	0.5mm以下の白色粒少量含む	良	
17	13	4T中Ⅱ層	須恵器	不明	底部	-	-	(2.7)	回転ヘラケズリ	ナデ	暗灰N3/1	灰色N4/1	0.5mm以下の白色粒少量含む	良	提瓶肩部か？
18	21	4T中Ⅱ層	須恵器	不明	胴～底	-	-	(8.2)	ナデ	ナデ	灰7.5Y5/1	灰白7.5Y7/1	0.5mm以下の黒色粒僅かに含む	良	
19	30	4T中Ⅱ層	須恵器	瓶	胴部	-	-	(4.4)	回転ヘラケズリ	ナデ	暗灰N3/	灰N4/	0.5mm程の白色粒少量含む	良	外面にカキ目後刺突文
20	8	4T中Ⅱ層	須恵器	甕	口縁	-	-	(5.6)	カキ目	当て具痕	暗青灰10BG4/1	暗青灰10BG4/1	1mm以下の白色粒多く含む	良	
21	10	4T下Ⅲ上	須恵器	甕	口縁	-	-	(6.5)	ナデ	ナデ	灰白N7/	灰白N7/	0.5mm以下の白色粒を少量含む	良	
22	16	4T下Ⅱ·Ⅲ層	須恵器	甕	口縁	(22.0)	-	(6.6)	ナデ	当て具痕	灰白N7/	灰7.5YR6/1	0.5mm以下の白·黒色粒,雲母ごく僅かに含む	良	
23	15	4T下Ⅰ層	土師器	壺	胴	-	-	(3.2)	ヘラミガキ	不明	にぶい橙7.5YR6/4	にぶい黄橙10YR6/3	緻密	良	
24	14	5T中Ⅱ·Ⅲ層	陶器	不明	口縁	-	-	(3.4)	-	-	(胎土)暗赤褐5YR3/4	(釉)にぶい黄橙10Y7/4	0.5mm以下の白色粒わずかに含む	良	
25	23	5T中Ⅱ層	須恵器	提瓶	胴	-	-	-	回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗オリーブ2.5YG3/1	青黒5BG2/1	0.5mm前後の白色粒ごく僅かに含む	良	
26	28	5T中Ⅱ層	須恵器	瓶	口～頸	(14.0)	-	(4.6)	回転ナデ	回転ナデ	灰N5/	灰N6/	緻密	良	
27	4	6T中Ⅰ·Ⅲ層	須恵器	坏身	口縁	-	-	(2.5)	回転ナデ	回転ナデ	灰白N7/	灰白N7/	1mm以下の黒色粒含む	普通	
28	11	7T中Ⅲ層	須恵器	高坏	坏部	(14.8)	-	(5.0)	回転ヘラケズリ	ナデ	灰白N7/	灰白N7/	1mm程の石英,雲母僅かに含む	普通	蓋の可能性もあり
29	22	7T中Ⅱ層	須恵器	甕	口縁	(23.4)	-	(5.3)	ナデ	ナデ	灰黄2.5Y7/2	灰黄2.5Y7/2	緻密	良	
30	12	9T上Ⅱ層	須恵器	皿	底部	-	(7.0)	(1.1)	ナデ	ナデ	にぶい黄褐10YR5/3	暗紫灰5P4/1	0.3mm以下の白色粒僅かに含む	良	
31	6	9T上Ⅱ層	須恵器	坏身	口縁	(10.0)	-	(1.9)	回転ナデ	回転ナデ	暗緑灰色10G4/1	暗緑灰色10G4/1	0.5mm以下の長石,黒色粒含む	良	
32	19	9T上Ⅰ·Ⅱ層	須恵器	蓋	口縁	-	-	(3.7)	回転ヘラケズリ	回転ナデ	褐灰色N3/	灰4/	0.5mm以下の白·黒色粒少量含む	良	
33	33	2525番地表採	須恵器	高坏	胴～脚	-	-	(9.1)	回転ヘラケズリ	ナデ	灰N6/	灰N6/	0.5mm以下の白色粒含む	良	柱部に4方向透し

平成15年度石貫ナギノ横穴群確認調査出土遺物観察表



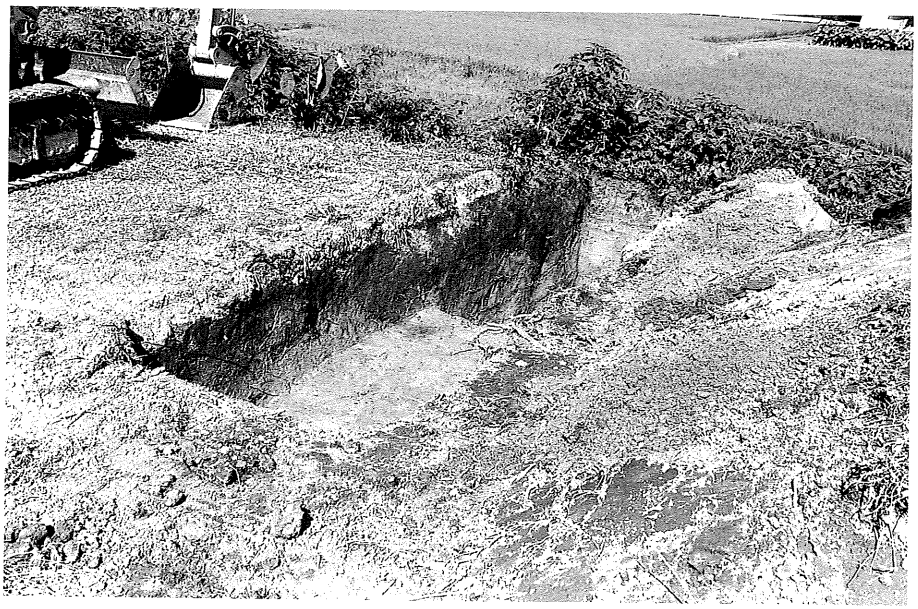
第13図　石貫穴観音横穴周辺地籍図

写　真　図　版

図版１

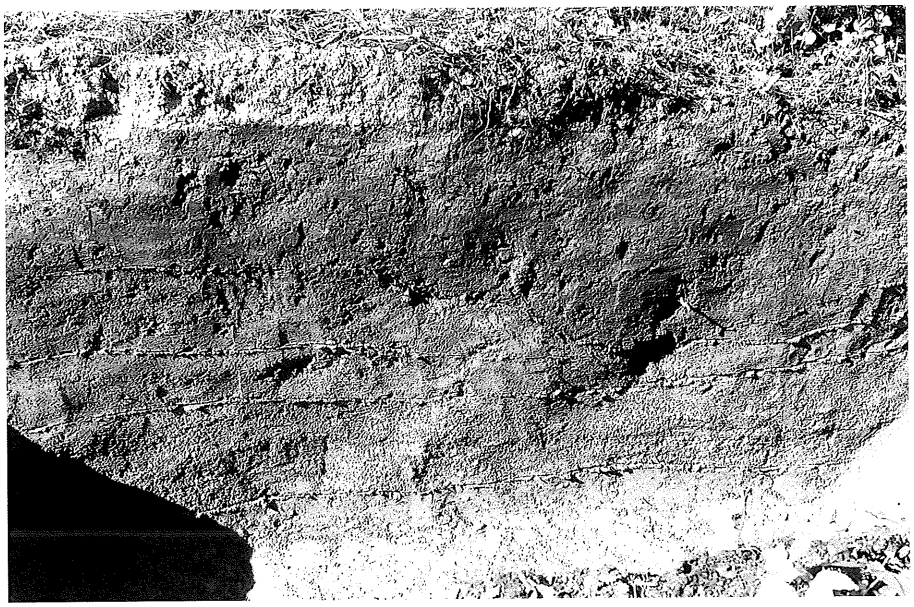
石貫ナギノ横穴群
（南東から）

石貫ナギノ横穴群
（北東から）



第１トレンチ全景
（南西から）

図版２



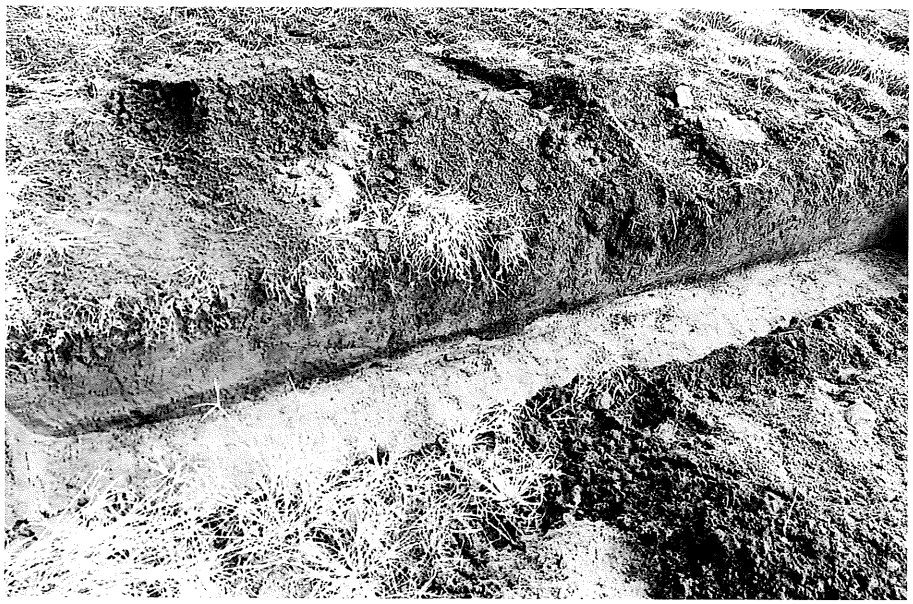
第１トレンチ土層
堆積状況（南から）

第２トレンチ上段全景
（東から）

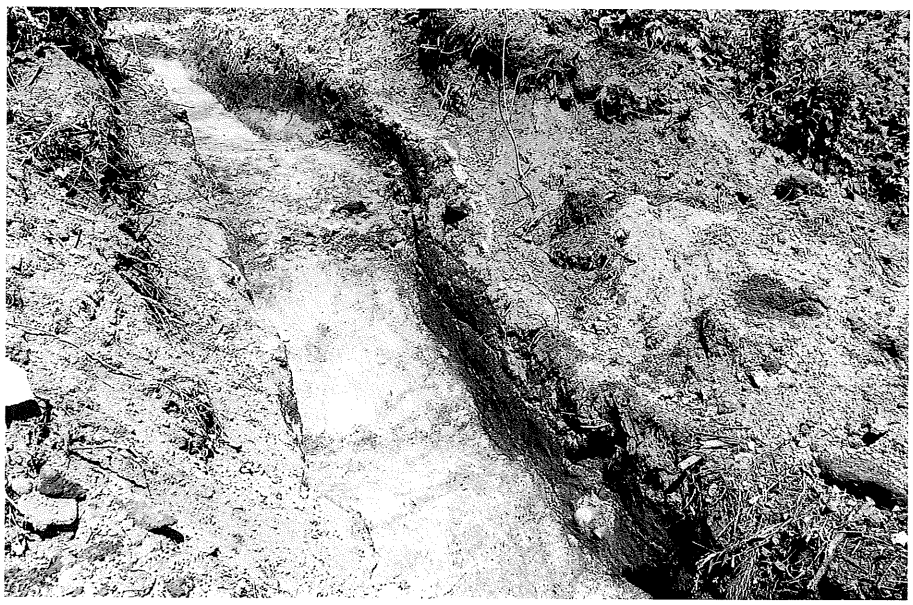
第２トレンチ上段
土層堆積状況（西から）

図版３

第２トレンチ下段全景
（南から）



第２トレンチ下段
土層堆積状況（南西から）



第３トレンチ全景
（東から）

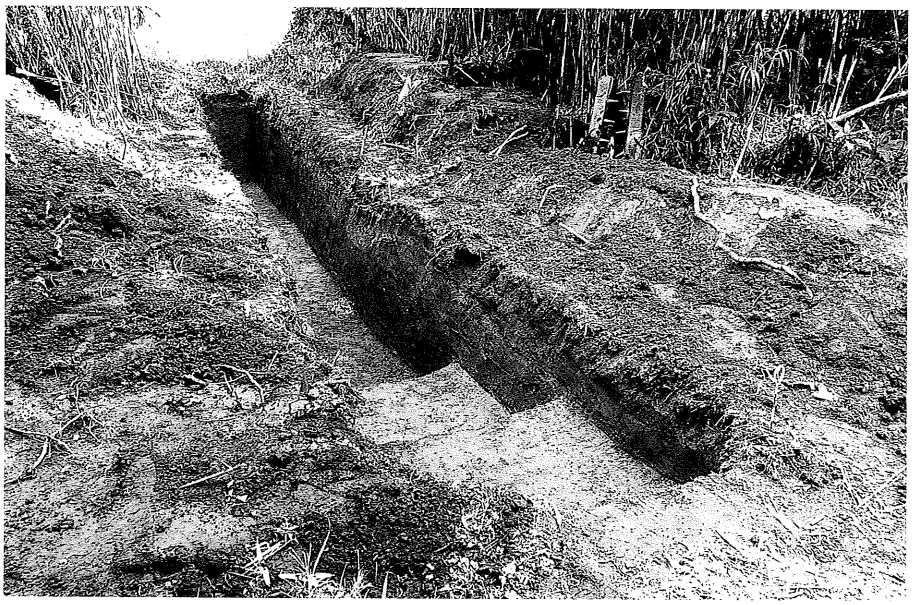
第３トレンチ下段土層堆積状況（西から）

第４トレンチ全景（東から）

第４トレンチ上段全景（東から）

図版５

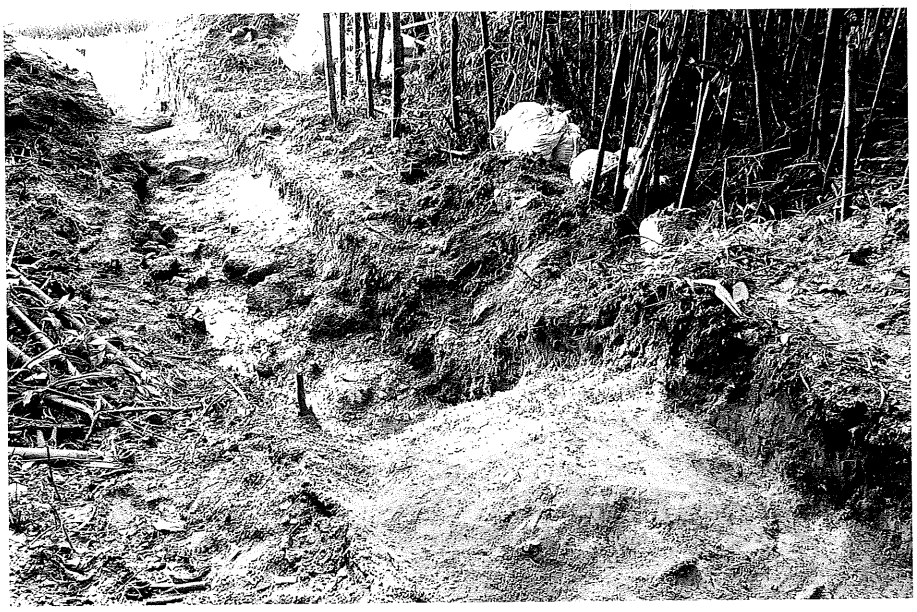
第４トレンチ上段
土層堆積状況（西から）



第４トレンチ下段全景
（西から）

第５トレンチ上段全景
（東から）

図版６



第５トレンチ上段
土層堆積状況（西から）

第５トレンチ下段全景
（西から）

第６トレンチ全景
（東から）

図版７

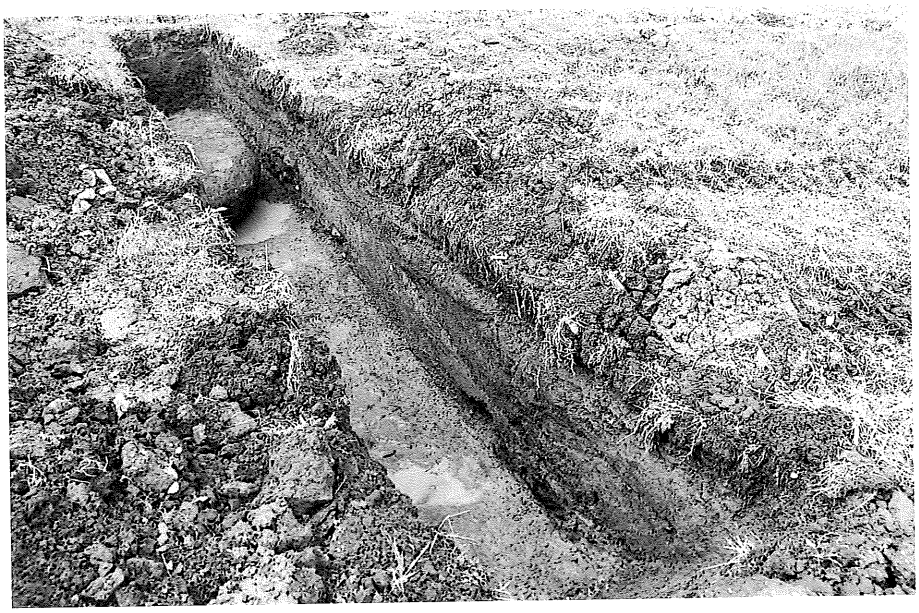
第６トレンチ下段全景
（西から）

第７トレンチ上段全景
（東から）

第７トレンチ上段
土層堆積状況（西から）

図版8

第7トレンチ上段
土層堆積状況(東から)



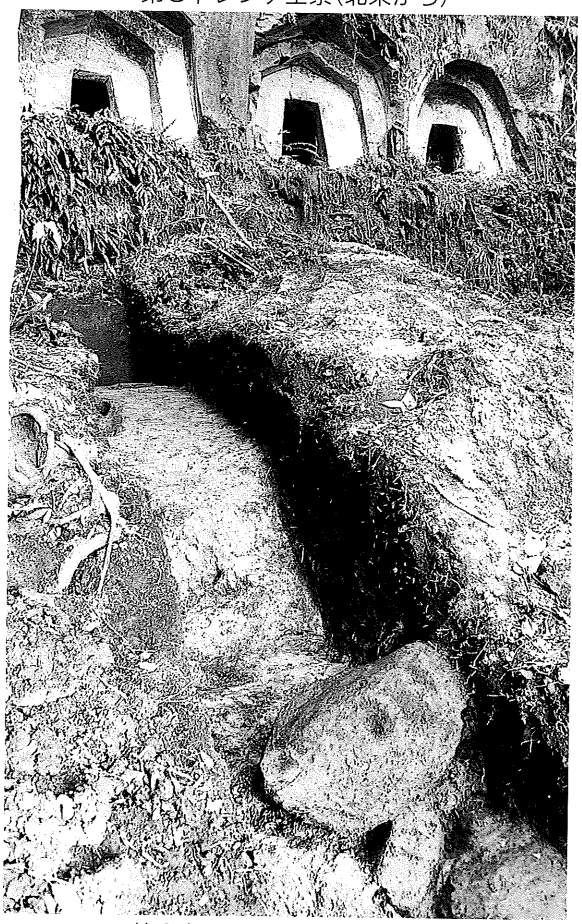
第7トレンチ下段全景
(西から)

第8トレンチ全景
(北東から)

図版９

第８トレンチ全景（北東から）

第９トレンチ全景（北東から）



第９トレンチ上部（北東から）

第９トレンチ全景（南西から）

図版10

第10トレンチ全景
（南東から）

第11トレンチ全景
（南東から）

第11トレンチ
土層堆積状況（南東から）

図版11

第12トレンチ全景
（南西から）

第13トレンチ全景
（南西から）

第14トレンチ全景
（南から）

図版12

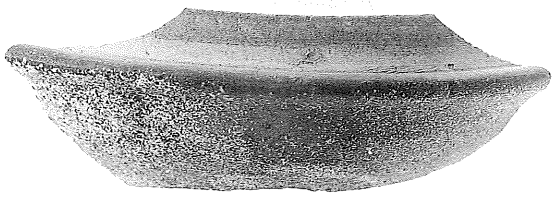
第15トレンチ全景
（南から）

第16トレンチ全景
（南から）

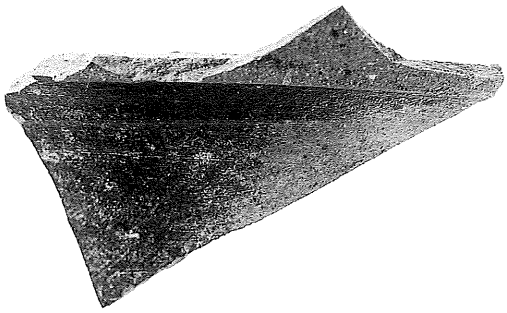
第17トレンチ全景
（南から）

図版13

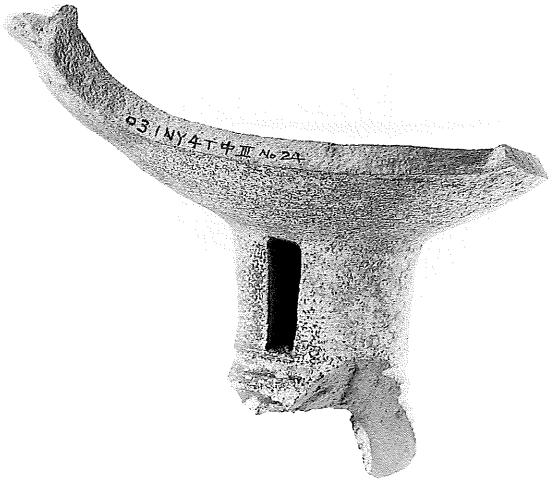
2



10

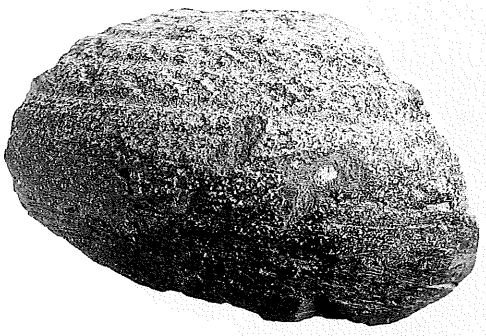


3

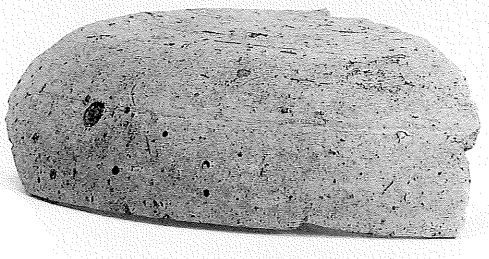


12

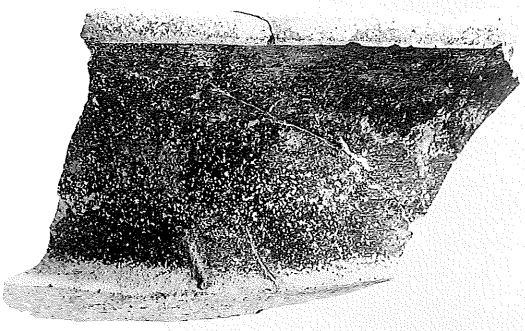
7



19

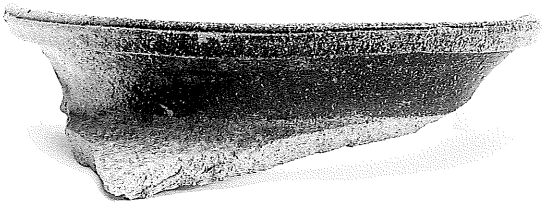


9



21

図版14



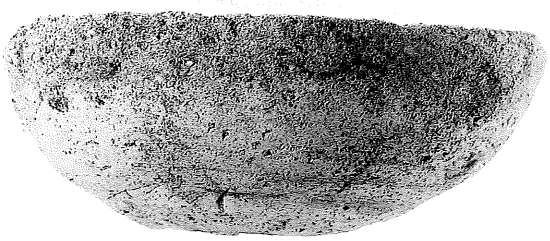
22

29

23

33

26



28

32

報告書抄録

ふりがな	いしぬきなぎのよこあなぐん
書名	石貫ナギノ横穴群
副書名	確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	玉名市文化財調査報告
シリーズ番号	第14集
編著者名	竹田宏司・末永崇
編集機関	玉名市教育委員会
所在地	〒865-0051 熊本県玉名市繁根木88-1
発行年月日	平成17年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
いしぬきなぎのよこあなぐん 石貫ナギノ横穴群	くまもとけん 熊本県 たまなし 玉名市 いしぬき 石貫	43206	014	32°57′55″	130°34′02″	平成15年8月19日 ～ 平成16年3月31日	約10,000	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
石貫ナギノ横穴群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	須恵器、土師器	

玉名市文化財調査報告　第14集
石貫ナギノ横穴群

平成17年３月31日発行

編集発行　玉名市教育委員会
〒865-0051　熊本県玉名市繁根木88-1
TEL0968-75-1312・FAX0968-75-1164

印　　刷　株式会社　有明印刷
〒865-0022　熊本県玉名市寺田123-1
TEL0968-73-2055・FAX0968-72-3504